無料体験版ー私を愛した邪教

　　私の愛した女

　夏美は隣のベッドで腹ばいになり、膝から下をぶらぶら振りあげながら、女性雑誌を読んでいる。
　愛らしい水玉模様のパジャマに包まれた女らしい身体のライン。そんな体勢だから、ヒップがクリッともりあがっていた。シャワーを浴びたばかりなので、頭髪は頭のうえでダンゴに結んでおり、まだ桜色にほてっているあらわな頬から首筋にかけて幾本ものカールされたほつれ毛が垂れかかっていた。
　「明日、午前中休講なんだ」
　福島透はタバコを灰皿にもみけして言った。ふーん、と気のない感じの返事をした夏美だったが、透にはふと妻の肉体のラインがなおさら柔らかくなったのに気がついた。
　「午後から会議。来期の学生募集のための勧誘行脚の割り振りが決まる……」
　夏美はさらにニヤニヤする。
　「新米の助教授はコキ使われてたいへんね」
　透は苦笑しつつ、自分もベッドにごろりと横になった。腕枕のなかで、顔だけ夏美にむけ、彼女のほころん

でいる頬の肉と可憐な口元をしげしげと観察した。
「甘いマスクの持ち主は何かと期待されるんでね」
その言葉に一秒だけ、表情筋が緊張した。
（この女の心には俺しか、男がいないんだよな）改めて妻の深い愛情を確認して、透はチリチリと焦がれるような優越感と、罪悪感を覚える。
「女子校生の前でわが大学の宣伝をブツわけじゃないくせに」
夏美はそう言うと悪戯っぽく笑った。
「あの年ごろの娘はね。そういうのにすごく敏感なんだ。いつだったか、埼玉のほうの女子校を回ったとき、廊下の奥からヒソヒソ声が聴こえてきたことがある。『ちょっといい男よね。先週の大学の講師はオジンだったけど……』って。ちゃんとチェックしてるんだよなあ」
夏美は生欠伸をかみころした表情だ。馬鹿馬鹿しい、きいちゃいられない、勝手にしてよ、そんな言葉を顔にだして、肩をすくめる。素っぴんでほんの少し薄い眉が額へひきつけられた。
「モテモテの男を亭主にすると、ほんとに苦労するわ。夏美、嫉妬しちゃーう」
ふざけた調子で口にしたが、これは彼女の本音だ、と、透は思っている。
夏美と結婚して、そう言えば、今年でちょうど五年目

だ。二十五歳だった彼女は来月で三十路を迎える。しかしまだまだ透を想う気持ちは熱く、大きい。今のように、単純なからかいにもあっさり乗ってきて、喜ばせてくれる。根が純情なタイプであるにせよ、これは男にとって『理想的な女房の在り方』かもしれない。
　もっとも、だからといって、透がそういった夏美の愛情に応えているか、理想の亭主の在り方を示しているか、となると、これはまったくそうではなかった。むろん、彼女は透を信頼しきっている。理想の亭主だと、一点の曇りもなく愛している。彼の職業が女子大の経済学部の助教授であるという、ちょっと、妻にとって気になる部分もないわけではないが、まさか教え子に手をだして浮気をしているなどということは夢にも考えていなかった。
　透はベッドからすばやく抜け出ると、夏美の横にもぐりこんだ。
　「何よ？」
　夏美は咎めるような視線を透に飛ばしたが、すぐに鼻筋に小皺を寄せて笑った。
　「何って、お前、明日は午前中授業がないんだからさ」
　「だからなんなのよ。甘いマスクの助教授さん」
　「だからその甘いマスクの男を独占しつづける魔性の女のご機嫌伺いという奴だよ」

　そうふざけながら彼女のパジャマのボタンを外しにかかる。ひとつ外れると、中から匂うようなピンク色の美肌がのぞけてきた。そっと手をさしこみ、触れ、やさしく撫でた。
　「……いやらしい人……」
　夏美は切れ長の瞳を閉ざして、かたちのいい唇でつぶやいた。いつもの媚態だが、今夜はとくに熱いものを感じる。ジャブのつもりで繰りだした、女子校生の話が対抗心を刺激したのだろうか。彼女は浅はかな女ではないので、おそらく無意識的、本能的なものなのだろう。それにしても、その努力は残念ながら、労の分だけ報われてるとは言いがたい。いくらなんでも、毎回、お決まりのパターンで悶えられては、男としては飽きがきてしまうものなのである。
　透はさらにボタンを外していき、胸もとをあらわにしていく。浅い胸の谷間がみえてきた。透は柔らかな小ぶりの乳ぶさに手のひらを重ねた。
　夏美は目元をほてらせながら、あえかな吐息をついた。それが男心を挑発する唯一にして、絶対の媚態だと思っている。しかし彼女の研究不足をなじるわけにはいかない。彼女は知らないだけなのだ。世の中にどれほど男を狂わせる手管が存在するか。そして、どれほど官能的なセックスライフに通じている女がいるか……。もちろん透も最初から知っていたわけではない。三ヵ月前、

田淵エリカに出会うまでは夏美とのセックスが至上のものと思い込んでいたのだから。
　夏美に透以外の男性経験がないのはほぼたしかだった。婚約時代に初めてベッドインしたとき、シーツは彼女の破爪の鮮血でしみをつくった。浮気は百パーセント、考えられなかった。彼女の肉体は透だけに捧げられたものであり、これからもそれは変わらないだろう。だからたぶん、この稚拙なセックスも向上するきっかけがないままに女としての寿命を終えていくのである。
　（なんともったいないことだろう！）と、透は思う。これだけの美貌と蠱惑の肉体の持ち主が初心な女子校生程度の性技術しかもちえないなどとは、まさに宝の持ち腐れだ。田淵エリカの半分ほどの情熱が彼女にあれば、透もきっと不倫を働く気も起こらなかったにちがいない。
　手のひらにコチコチとあたってくる乳首の感触に微笑しながら、透は夏美の頬にキスした。女性雑誌をフロアに投げ落とし、二人は重なりあうように抱擁した。
　夏美はほっそりした腕を透の首にまきつけ、頬ずりしてくる。
　「……ああ、あなた……」
　久しぶりに夫に身体を求められて、彼女も昂奮している。明日の午前中は暇だと告げられたとき、当然のように彼女は期待して胸が熱くなった。季節柄、大学は会議

会議で忙しく――と、透は説明していた――かなりご無沙汰していたのだ。二週間……いや、三週間はあいているだろう。セックスの真の悦びをしり――と、彼女は思っている――肉体的にも成熟期にさしかかっている人妻にとってはそろそろ欲求不満を感じてくる頃だ。

　前戯にも自然、情感がこもってくる。いつもより熱烈なキスが幾度もかわされた。まだ裸になりきっていないというのに押しつけられてくる彼の股間に、夏美はめずらしく自分から腰をふってこたえた。

　胸前が肌けたパジャマからボゥと朱に染まっている艶やかな胸がのぞけている。最後のボタンを外し、優しくパジャマを開くと、可憐な双乳がこぼれでる。豊満とは言えないがまるくふっくらとした乳ぶさが先端を欲情させて汗ばんでいた。

　透はそれをつかみ、胸もとから首筋へ口付けしていく。

　「……うン……ハァ……」

　キスをすべらせていき、熟女の色香が生まれはじめた頬から耳へ攻め昇る。頭髪に手をやり、束ねているピンを抜き取って、柔軟な黒髪をほぐした。サラサラと肌に落ちてきたその匂いを吸い込みながら、透はどうしても愛人である田淵エリカと比較する誘惑に勝てない。

　まず年齢は、なにしろエリカは現役の女子大生なのだから、八つほどの違いがある。八年は女の肉体にとって

決定的な差をもたらすのに十分すぎる年月だ。もちろん身体の大きさや骨格等の個人差はどうしようもない。エリカは百七十近い身長をもっており、百五十五センチ程度の小柄な夏美と対等に論じるのは可哀相なのだが、それにしても、やはり感じざるをえないのである。
　手のひらのなかで従順に揉まれている夏美の乳ぶさの小ぶりさと、エリカのＤカップバストの弾むような若さ。どうしたって愛人のほうに軍配をあげざるをえまい。ヒップのボリュームも大差がついている。九十のエリカに対し、夏美のそれは八十五を切っている。単純な数字の比較だけではなく、なんと言うか、生命力が圧倒的に違うのだ。エリカの肌は小麦色に焼けており、それがまた拍車をかけるのかもしれない。こうして夏美と肌を合わせていても感じない情熱がエリカの肌からは伝わってくる。それは三十六歳になる透にとって非常に貴重なものに思えるのである。
　透は抱擁をいったん解いて、夏美をうつぶせにすると、上半身からパジャマを取り去った。絖光るような背中が網膜ににじむ。背筋がうねり、シーツをまさぐるように蠢いている腕のおかげで、クリクリとした肩甲骨が浮きあがっている。ウェービーな黒髪が小さなホクロのある両肩にかかっていた。
　エリカの髪はストレートロングで、よくしぼりこまれたウエストにまで届くかという長さ。そして少し茶髪を

入れている。小麦色の肌によく似合うヘアスタイルといっていい。
　パジャマのズボンのゴムに指をかけると、夏美の手がそれを押さえた。
　「……駄目よ。電気を消して」
　「たまにはよく見たいんだよ。女房の素晴らしいお尻を」
　「バーカ」
　だが夏美は万更でもない様子で、つよく抵抗する気もないらしい。透はすっとズボンをおろした。ベージュのパンティがむっちりした双臀にはりついている。こんな地味なパンティをエリカは決して身につけないだろう。透が知っている範囲では薄いブルーか、ピンク。あるいはＴバックがお気にいりだ。夏美のヒップにベージュ以外の色のそれがはりついていたことは、ついぞ覚えがなかった。
　膝までおろすと、パンティの縁に指をもぐりこませ、めくるように剥きおろす。クリッとした臀丘が露出する。ちっとも悪くない。年齢的な弛みだとか、崩れだとか、そういったものには無縁であるといっていい。だが、やはり、エリカの抜群の美臀に比べれば、見劣してしまう。あの肉の張り具合と、弾力感は一度味わったらやめられない魅力に富んでいるのだ。
　爪先からズボンとともにパンティもまとめて抜き取っ

た。全裸になった夏美。もう何度も見ているはずなのに、違った意味で新鮮である。白百合の横に深紅の薔薇をもってくれば、おのずと白百合の印象も変わってこよう。エリカとの肉体の比較は、透にちょっとした倒錯の気分をもたらしているようだ。妻を裏切っているという良心の呵責、女性の肉体を吟味するなどというインテリの良識をふみにじった意識の自覚、それらはどこか嗜虐的な官能を覚えさせてくれる。

　透は自分もパジャマを脱ぎ捨てて全裸になると、彼女の伏臥体のうえにのしかかっていった。

　「うーン……」

　夏美はシーツを握りしめて訪れようとしている刺戟感と快美感に鳥肌をたてた。ぴったりと重なると、彼女のヒップにペニスが押しつけられた。残念ながら、完全なエレクトとはいかなかったが、まあ、まだ前戯の最中なのだから、不満に思うことはないだろう。しかし、透はやや狼狽する。エリカの裸体を前にしたときの、あの激烈な昂奮ぶりを思い出せば、その落差に驚かないわけにはいかない。身体は心よりも現実を反映するのだろうか？　心では夏美への愛情はこの期に及んでもちっとも衰えていないと思っているのに、肉体的反応ははっきりと鈍くなっているのだ。

　（男の身体の生理ってやつか。恐いね、どうも）

　肩先からうなじへ、あたかも心の動揺をカムフラージ

ュするかのように、熱烈にキスをしまくりながら、透はペニスを尻肉に摩擦させる。柔らかな肉丘や谷間にようやく硬化し熱化しつつあるそれがなぞっていく。
　夏美の呼吸が荒くなってきた。二の腕にまわされた彼の手を握りしめ、頬を寄せていく。瞳が潤み、顔は薔薇色に染まっている。
　学生たちとのテニスでそこそこ引き締まっている透の身体と柔らかな夏美の身体が折り重なり、やがてこらえ切れなくなったように、ベッドのうえを転がりはじめる。二人は正面位で再び抱擁すると、ディープキスを飽きずに貪った。
　妻の唾液の味はやはりエリカのそれとは違っている――
　夏美の発情ぶりに煽られて、かなりの昂ぶりを覚えつつあるのに、透はまだそんな比較をつづけていた。そして自分の肌にチクチクとふれてくる夏美のアンダーヘアの装いさえも、その吟味のひとつとして冷静に受けとめるのである。当然のように――なぜ当然なのか、ようするに男の偏見なのだろうが――田淵エリカの股間に密生する陰毛のほうが、夏美の陰毛よりも繁茂し、そして面積が広いようだった。エリカは小判型で奥底までつつづいているほどで、萌えさかるような個性と情熱をあたかも表現しているようであり、恥丘に逆三角形に植わり、スリットへいくほどすぼまって、中途で霞んでしまう夏

美の生えぶりとは絵に描いたように対照的である。
　男のほとんどは夏美のデザインのほうを好むのだろうけれど、透にとっては見飽きたものであり、エリカの濃厚さに心を奪われてしまっていた。
　透のキス攻撃に夏美の美貌はどんよりと濡れ光ってきた。と同時に彼女の官能もじゅうぶんに昂揚していると思われた。執拗な愛撫をほどこされた双つの乳ぶさはその真っ白な乳肌に透の手形をしみ込ませながら息づいている。小さめの淡い乳暈は精一杯、巨きくなって充血し、乳頭はピーンと衝き勃っていた。
　エリカのそれは――さすがに自分のしつこさに身内で苦笑しつつ――自己主張するようにもっと巨きい。肉厚でもある。巨乳なのでバランスがとれているが、ちょっとまちがえば白人のポルノ女優のようにグロテスクささえ感じさせるだろう。しかしそうなってはいないのだ。すべてを若さが救っているといってよかった。
　透はペニスの先端を妻の秘孔にあてがい、ゆっくりと結合させていった。すでに豊かな濡れ具合を見せていた。
　「あン……うむむ……」
　しっとりした色香をたたえた夏美の美貌が汗を噴き出しながら激しく悶えている。眉間に皺を寄せながら眦をさげた悩ましい顔をきつくそむけたかと思うと、今度はあっと小声で叫んでのけぞり、喉をさらす。固く瞼を閉

じ合わせたまま、腕だけは透の首に巻いてしっかり抱きつこうとする。
　男性経験はエリカのほうが断然多いに決まっているのに、膣腔の狭隘さははるかにエリカのそれのほうがきついだろう。使い込めば使い込むほど広がってくるというのは、限度を超えた回数にのみ適用される話で、それを決定する原因の大きなファクターは年齢なのだ。挿入したペニスにからみついてくる筋肉の強さ、収縮力の持続、どれをとってもエリカが上回っているようである。むろん、好みの問題だと人は言うだろう。夏美の蕩けるような媚肉がもたらす、柔軟な抱擁力こそが真の女の魅力なのだと。否定するつもりはまるでなかったが、セックスにロマンはいらないというのが透の今のところの考えである。激烈な快感を与えてくれるオ×××こそ、最良のオ×××なのだ。
　ゆっくりと腰を動かしながら、妻のむさぐるしいまでの痴態を眺めつつ、やや白けた気分になっている自分を自覚した。エリカとの交接ではセックスに溺れていくのはいつも透のほうなのである。夏美に対する執着とエリカに対する執着の差はこの辺りにあるのかもしれないと思った。つまり、主従の関係がちがうわけだ。妻との間では透が主導権を握っているが、エリカとのベッドではエリカが女王様なのである。彼女が導く倒錯的なセックスはもとより、『導かれる』というその事実そのものに

透は抗しがたい魅力を感じているのだ。
　（俺はマゾ男かい）
　苦笑しつつも、さほど否定する気もなかった。とにかくエリカとの出会いで新たな性の世界が広がったのだ。夏美には悪いが当分、不倫を解消するつもりはない。
　「あぅ……あーン！　あ、あ、透さん！」
　自分の身体の下で、切羽つまったように喘いでいる夏美。形相は十分前とは別人のように変わってしまっている。清楚で品のある顔立ちが、激しくゆがみ、紅潮して生汗にまみれている。真っすぐな鼻筋には皺が消えることがなく、小さな丸い鼻頭に玉の汗がブツブツと浮きだし、小鼻がひきつっていた。ぽっちりとした唇は歔き声を放つたびに喉奥を見せつけるまで、大きくあけられるのだ。
　（夏美、そんな風じゃ、俺は愛想をつかしちまうんだぞ）
　男の愛を一身にうけて、夢幻の境地を一人――彼女は透も一緒だと思っているのだろうが――でさまようだけの、無技巧の妻に透は内心、不満をつぶやいた。
　（お前も努力しなくちゃ）
　透は妻をこのままイカせる気はなかった。自分の不貞の原因を妻の献身の低さに求めるほど低劣な男ではないけれど、彼女へのもどかしさに対する無言の抗議表明はなすべきだろうと思うのだ。そう簡単に満足させては、

ますます夏美との距離が遠くなるような予感もある。悶えさせて、狂わせて、弄んでやったら、彼女の知らなかった一面が露呈される可能性だってあるだろう。
　意地悪く、透は腰の律動を大きく、そしてスピードを速め、夏美にクライマックスの準備を促すのだ。冷たく突き放される苦悩をより高めるために……
　「イイわっ、とってもイイ！　あンーッ――」
　夏美はひときわ激しくのけぞりながら喉をかすれさせた。透の身体にしがみつき、キリキリとペニスをしめつけて子宮を痙攣させた。
　ふっと、透は腰の動きを弱めていった。
　「あっ、まだ……まだだわ……」
　透が勘違いをしたと思ったらしく夏美はまだのけぞったまま、緊張をとかない。すぐに再開してくれるとたかをくくっている。
　「ね、ねえ」
　甘えた声で焦れったそうにうながした。
　「夏美……」
　透は生汗でツルツルしている乳ぶさにキスしながらとうとう完全に律動をやめてしまった。ようやく、いつもの様子とちがうことに気づいた夏美はうっすらと瞳をあけた。
　「……どうしたの……」
　「たまにはさ。別の体位で、さ」

　透は夏美の顔をのぞきこんでニヤニヤと笑った。その表情をみても、夏美はしばし彼が何を求めているのか、わからなかった。結婚生活の五年間、正常位だけしか経験のない彼女である。仕方のない反応かもしれない。
　夏美の返事もきかず、透はさっそくペニスを引き抜きにかかる。エリカとであれば、繋がったまま回転するのだが――それがまた激烈な肉美を生み出す――さすがに夏美は拒絶するだろうと判断したのである。
　しかし後退していくペニスに、夏美はおかしいくらい狼狽して信じられないほどの力で逃すまいと食いしめてきた。からめていた四肢で深く抱きしめる。
　「いや……」
　艶っぽい声で耳元に囁きかけてくる。それがこの女の精一杯の媚びなのだ。お高くとまっているのではなく、無知なのである。
　透は無情にもズルリと引き出した。豊かな愛液にまみれた肉棒がカッと亀頭をふくらませている。
　どうして？　という目で夏美は透を見つめた。いぶかしげなその表情にしとどに乱れた黒髪がうっとうしく垂れかかっている。
　それはなかなかセクシーであり、透は気持ちがグラつきかけたが、なんとか踏みとどまり、『懲らしめ』を続行する。
　腰をつかんでねじ曲げる。いやよ、というかすれ声を

無視して力をこめる。すでに腰のタガは外れかかっているし、小柄な夏美の身体はたやすくひっくり返った。悲鳴がシーツに顔を押しつけられたことで、ふさがれた。両手を突っ張って、起きあがろうとするのを重ね餅に体重を浴びせて、抑圧する。悔しげにシーツを握りしめているその手をつかんで、なだめすかすように耳元へねちっこくキスをしまくる。

「いいじゃないか、夫婦なんだから」

「だって……いやだわ……やっぱりこんなの……うむむ」

最後は唇を奪われて言葉にならない。唾にまみれた舌を吸い出し、存分に嬲りまわす。知らず知らずのうちにエリカとのセックスで覚えた技巧を繰りだしていたが、夏美は気づく余裕もないようだ。チュウチュウと淫らな音をたてながら、送り込まれてくる夫の唾液を飲み下しているばかり。唇が放れたときには再び目がトロンとしていた。身体の力を蒸発させたように、ぐったりと突っ伏す。

よしよしと頭を撫でてやりながら、彼女の背中から上体を起こすと、透は優しいウエストをつかんで膝をたたせた。

「ううン……」

羞恥心に呻く夏美。まんまるい双臀がクッと持ちあがり、腫れた性器をヌンと垂れこめさせた股間が目の前に

出現した。背中を撫でながらペニスを押しつける。息を押し殺して夏美はシーツを握りしめる。ズズッと送り込むと、あごを突き出すように赤ら顔をのけぞらせた。そのまま侵入させる。陰毛がケバ立っている恥丘に手をさしいれ、そっと押してみるとペニスのこわばりが感じられた。

「ほら、手を突っ張って、上半身も起こして」

「ハイ……」

従順に夏美は身体を起こした。乳ぶさがたわわに垂れ、ウェービーな黒髪が真っ白の二の腕にまで落ちた。

ゆっくりと抽送を開始する。鼻を鳴らす夏美。犬のスタイルが前後にゆれる。乳ぶさをつかみとられ、乳首を指の又に挟まれながら、リズミカルに揉まれた。

ひっきりなしに喘ぎが洩れる。がっくりと顔を伏せて、バサバサの乱れ髪のなかに隠していた表情を、透はその頭髪を握って引き起こした。真っ赤に昇せた容貌が切なげに悩乱している。

「お、おかしいわ。今日のあなた……」

「そうかい？　いつも以上に夏美を愛しているからかな」

「バカ……」

夏美は思わず微笑んだが、きつく子宮を小突かれるとともに、乳首を絞りだされて揉みつぶされると、悲鳴に近い歓喜の声を放った。しだいにピッチが早まってく

る。いやがおうにも高まる至福の瞬間への期待。四つん這いの身体からボタボタと汗がしたたる。素肌から濃厚な女の匂いを発散し、黒髪をゆさぶって、夏美は絶頂へと駆け昇る。もう腕を突っ張っている余裕もなく彼女はガクンと上体をベッドに落とした。
　と、――
　透はその力の抜けた細い手首をつかみとった。手を握りあってイクのだ、と夏美は早合点したが、そうではなかった。彼が握ったのはあくまで手首だった。そして両腕をそのままグイと手綱のように背後へ引っ張りあげたのである。
　「ああッ」と、夏美は思わず大声をあげた。自分のとらされている姿のドぎつさに眩暈がしそうだった。もちろん結合はなおさら深まったので、快美感は増したのだが、羞恥心がそれを相殺した。夏美はやめてと透に訴えた。
　「す、すごいぞ、夏美！」
　機転をきかせ、自分がどんなに興奮しているかを演技して、夏美の抵抗心をそいでしまおうという作戦。
　「最高だ！　こんなのは初めてだ！　愛してるよ、夏美！」
　「だ、だって……」
　そうまで言われてしまえば逆らえないし、この不安定な体位がもたらす微妙な肉の繋がりの変化は、確実に官

能を焙っている。三十目前の熟れた夏美の身体にはこらえるすべがない。
　透は妻の両腕を操って、右に左に上半身をゆさぶってやった。
　「あーン……こんな……」
　かと思うと、自分の身体を後傾させ、夏美が直立するくらいにまでひっぱりあげる。
　「ヒィィィーッ――」
　頬をひきつらせながら紅潮した裸身をのびあがらせ、夏美は絶叫する。もう、彼女は透のテクニックに翻弄されまくり、まさしく宙をさまよう恍惚の空間にいた。
　このまま、二人で一緒に頂点に達し、夫のくれる精液を腹一杯に呑み込んで失神することができるなら、この破廉恥な行為について彼を責めはしないだろうと、夏美は混乱する脳で思った。
　（ああ、凄い……イキそうだわっ……）
　こらえきれない感情が大波のように彼女に襲いかかってきた。
　「し、死ぬッ……」
　顔にかかっていた黒髪を兇暴にうち払って、凄絶なよがりをあらわにした形相を晒した。
　残酷にも、彼女の『空中遊泳』はそこで途絶された。見放すように、透は手首を放り出し、彼女は顔面からベッドに墜落する。

四つん這いが半ばつぶれたバックスタイルは、男にとっては征服感が、女にとっては屈辱感が深いという。なるほどそれは当っているかもしれない。
崩れた女体は尻だけが『生きている』印象で、残りは肉の塊のようにも見える。乱雑な頭髪が猥褻感を添えている。
透はペニスを引き抜いた。殺気立っていた夏美の身体がスッとしぼんだ。うつぶせからもう一度、あおむけに転がす。こうこうとした照明のなかで映しだされた彼女の顔。目尻から涙があふれている。瞼と鼻の頭がピンク色だ。無言だが、こんな拷問は許せないと糾問してくるようだった。しかし彼女は完全に体力を消耗していて、腕を動かす力もないらしい。普通なら、泣き顔など両手でおおっているはずである。そして開き切った股もまた閉じあわせる力を失っていた。
唇を貪ろうとすると、彼女はわずかに顔を背けて非難の意志を表した。
（そうそう、それでいいんだよ。夏美）
透は唇を頬に押しつけ、そのまま点々と裸身を下りおりていく。体温は部分によってずいぶん違うものだと知った。顔はまずいちばん熱い。それから胸もと、おっぱい、顔に匹敵するぐらい熱いのは跨ぐらというわけだ。発情しきり、昂奮状態を解消されぬままに置いていかれたその部分はフェロモン物質を放散して雄を誘引する蘭

のように満開に咲き、爛れ、顔を近づけるだけでほてりが感じられるのだった。
　透は彼女の胸の奥の期待に肩透かしをくわえるように、クンニを控えた。そして開いている下肢をなおさら左右へ裂くように内腿をもたげるのである。
　「……いや……」
　夏美はそうされても抵抗できない己れの体力のなさに唇を噛みつつ、ただ内腿の筋肉をピクリピクリと震わせるばかりである。
　透が攻撃の目標としたのは、その内腿の敏感そうな筋肉であった。そこからふくらはぎの腱、足首の裏側である。
　スッと尖らせた舌先でピーンと伸びた下肢の裏側を刺戟しはじめた。ブルッと戦慄したように女体がうごめいた。心では不法行為を働いた夫への怒りでいっぱいなのに、たったそれっぽっちの愛撫でもたちどころに反応している肉体が恨めしかった。恨めしかったがどうしようもない。こらえていた声も、太腿の付け根から膝の裏までペロリと舐めさすられるや、一気に噴きあがった。それもありったけ淫靡な色合を含んでいる。
　「あむ、ンンーッ……」
　アーチ状になった両腿の内縁を肛門をかすめながら隣の足へキスを走らせると、声はもう上擦ってただただ肉欲の訴えをするものとなる。

　ふくよかなふくらはぎをしゃぶりつくすと、妻の足指がカッと開いたり、硬直したように握られたり、あるいは咆哮を発するように外に折れたりしているのが見えて、透はニタニタとほくそ笑んだ。最もどうにかしてほしいはずの性器に近づいたり、遠ざかったりを繰り返すこの色責めはやはり効果を発揮したようである。
　「……もう駄目……」
　粘っこい調子で敗北を口にする夏美。
　「どうにかして……」
　これほどはっきりと劣情の極まりを口にする彼女もめずらしい。しかしそれでも透にはまだ不満だった。「どうにかして」ではなく「メチャクチャにして」とか「こねくりまわして頂戴！」といった超卑猥な言葉を聞きたかった。田淵エリカのように――
　鼠蹊部を舐めてやると、彼女はもう言葉すら発せられなくなった。代わりに開帳された媚肉の底から吐淫の湧出が起こった。なんともグロテスクな眺めである。シーツは大小の水玉模様に飾られている。
　これ以上、焦らすのは深刻な家庭不和をもたらすに違いないので、透は最後の一戦を交えるべく、おおいかぶさり、貫いた。夏美の悦びは凄まじく、すぐに軽いアクメを連発させたほどだ。それでもなお満たぬ欲望をぶつけんと、深々と押し入ってきた透を食いしめること、食いしめること！

「すごいな、お前――」
これは本音である。食い千切られそうな強靭さである。これならエリカと太刀打ちできそうなくらいだ。負けずに緩急をつけたピストン運動でこたえる。夏美は思わず泡を噴いた。頬にとぐろを巻いて貼りついているほつれ毛がよだれの筋にさらに濡れる。
乳首をつまみ、ひっぱりだす。乳ぶさがもちあがった。あまりの痛さに夏美を激しく泣いたが、それすらも、もう、肉悦への刺戟だった。
透は彼女の身体を抱き、そのままクルリと一回転する。
「死ぬぅぅ一っ」
「まだまだ、夏美、まだだよ！」
叱咤しつつ、助けを乞うようにからみついてくる両腕をふりほどくと、彼女の肩をつかんで押しあげた。透の股間を膝で跨いで夏美は直立した。抱き合いながら彼女が上にくる瞬間はあっても、これほどまでの完全な騎乗位は初体験だ。といっても、透が両手をのばして支えてやらないとすぐに崩れ落ちそうではあるが……。
夏美は半眼を白目にし、口を痴呆のように半開きにしたまま、フラフラと酩酊しているようだった。自分の体重で結合はさらに深くなって官能をえぐってくる。
下になった透は女体からしたたり落ちてくる濃い香りをもった汗を浴びる。鼻の頭から落ちた汗、乳ぶさの先

っぽからのミルク汗、アンダーヘアの毛先からの雫。
　透は双乳をわしづかみしてユサユサと愛撫する。これはやはり巨乳でないと感じがでない。エリカのあのゆさぶるだけでブルルンと音がなりそうなボリュームでなければ駄目だ。
　（来週あたり、誘ってみるか。へへへ、今日はまあスパーリングというところだな）
　スパーリングの相手としては不足かもしれない。ヘビー級を相手にするのに、フライ級が練習台じゃ、自分の調子を見極めるのには不十分だろう。
　透は軽々と腰を持ちあげ――レスリングでいうブリッジ――そのままローリングしてやった。
　「ほら、夏美、俺、腕が疲れちゃったから、自分でおっぱいをモミモミするんだ」
　戸惑っている夏美をズンズンと衝きあげてそそのかす。夏美は夢遊しているように、小さな手で小ぶりな双乳をつかんだ。
　「こ、こう？」
　「そうだ。そのまま力一杯、揉んでみろ」
　熱く苦しげな吐息が大きく開かれた彼女の口からついてでた。胸から剥がされるように持ちあげられた乳ぶさは乳輪を扁平にし、乳首を赫くして、餅のように練られていく。夏美は自慰に溺れながら、かすかだが自分から腰をつかいはじめた。

「そうそう――」
　透は優しく声をかけた。さすがに腕枕まではしなかったが、そうしたい気分だった。妻の色ボケした表情や仕草をこうして目のあたりにするのは初めてで、やはり努力はしてみるものだな、という感想である。が、男とはつねにわがままな動物なのだ。こと性の分野についてはなおさら身勝手に思考するのである。
　せっかく夏美が淫らに、卑猥に、積極的に行為するようになってみれば――つまり福島夏美の田淵エリカ化――、ますますエリカの物凄さが見えてきしまうのだった。同じ行為に興ずれば、身体の差が明白なものとなって前面に出てくるのである。小兵力士が巨漢の横綱と同じ相撲をとってもまったく勝ち目がないのと一緒だ。女にはそれぞれの質があり、それを履き違えれば、待っているのは滑稽な結末だけかもしれない。夏美にはとうていエリカの代役は勤まらないのだ。夏美の良さはベッドではなく、通常の平凡な夫婦生活において発揮されるものなのだろう。それを否定はしない。しかし物足りない。いったんそう感じ、そして痺れるような禁断のセックスを知った今となっては、もう駄目だ。夏美にエリカの代役が無理とわかれば、夜はやはり現役女子大生の愛人と過ごさなくてはならないのである。
　一分とたたぬうちに、夏美はクライマックスを迎えた。そうとう白けた心境だったが、彼女にとっては目い

っぱいの収縮力だったので、それに免じて透も一気に精を解き放ってやった。あっ、と、ひと歔きすると、夏美は全身の力を喪失して崩れ落ちた。透が覚えた充足度の何倍もの悦びに彼女は沈没し、身体を透の胸へ投げ出した。柔らかな重みを抱きしめてやらず、横に退けてベッドの縁に座るとタバコに火をつける。

　完全な失神の彼女。伏臥し肋骨の透けた脇腹を静かに起伏させている。

　肩をつかんであおむけにひっくり返した。それでもまったく覚醒する様子はなかった。毛穴が噴きひろがった素っぴんは生々しい魅力をたたえてはいる。そしてかきまわされて爛れに爛れた媚肉の赤さと精液の白濁がセックスのシュールさを見せつける股間はいっぱしに淫乱の相ではあるわけだ。

　透はタバコを咥え、たちのぼる紫煙に目を細めながら両手を媚肉に添えた。左右の畦をつまみ、くつろげ開いた。ムッと性臭が鼻を刺激してくる。とば口に残っていた精液がトロリと垂れだしてきた。肛門まで粘液にふさがれて見ているだけでもムズムズしてくる。しかし夏美は依然として意識を取り戻さず、されるがままになっている。

　透はそれをいいことに今度は足の親指をつかんで両足を持ちあげた。そろえて直立させたそれをＶ字に開脚させた。大腿筋につられて性器が引きつる。唇で「いー

っ」とやっているような格好。これはおもしろいと、透は足にさまざまな態勢をとらせ、性器の百面相を楽しんだ。
　妻が夫との深い愛情に満足し、何の疑いもなく失神しているその隙に、夫は妻の身体で、そうする以外に価値のない肉体だといわんばかりの玩弄をなしているのである。

　　私の愛している女

　田淵エリカはベッドの上で胡坐をかき、バドワイザーのつがれたグラスを長くのばした爪も見事な指でつかみ、そっと魅力的な唇にはこんだ。
　彼女は全裸であり、たわわなバストも跨ぐらの▽も少しの恥じらいもなく露出させている。美しく焼かれた小麦色の肌。茶髪のはいったロングヘア。ハーフのような彫りの深い美貌。そしてボリュームたっぷりの若々しいボディ。
　透は腰にバスタオルを巻いた半裸の姿で趣味のいいリビングセットのソファに身体を預け、愛人のセクシーな肉体に見惚れている。たった今まで一緒にホテルのバスタブに入り、乳繰りあっていたのだ。色白の夏美であれば――と、不倫の現場にくると、今度は愛人の身体を妻

のそれと比較している――あれほど激しく揉みにじってやれば、桜色に手のかたちがつくのであるが、エリカの乳ぶさはまったくそんな痕跡がない。小麦色ということもあるだろうが、たぶん肌が強いのだろう。いずれにせよ、薄茶色の乳首をツンと上向かせて、こんなところでもこの女は刺激的に自己主張しているようだ。

「どう？　試験の問題できた？」

悪戯っぽい目をしながらエリカが尋ねてきた。彼女は透のゼミの学生であり、学部の試験が目前に迫っている。

「学生の肉体に溺れて試験問題を漏洩する助教授なんて、いまどき格好悪すぎるよ」

透はバドワイザーのグラスをテーブルにおいて、そのままダブルベッドに身を投げ出した。冷たいシーツが心地よい。胡坐に組まれた彼女のすらりとした二肢が目の前にある。小判型の密茂がまさに濡れ羽色に輝いている。

「どういうサービスをすれば、口を割る？」

「どういう責め苦を与えれば口を割る？……の誤りじゃないの」

二人の会話は、エリカが漏洩の必要などないほど優秀な学生であることを前提になされているので、ちっとも緊張感がない。じっさい、彼女の成績はゼミでもずば抜けていて、こんなに遊びまくっているのに、どうしてと

疑われるほどなのだ。教授陣とベッドをともにし試験問題を手に入れているという、うがった風評もあって、先程の会話はそれを意識したものでもある。しかし透の奉職している大学は偏差値のレベルで言えば中の上くらいなので、エリカほどの頭の持ち主であればさほど勉強しなくてもトップの成績は残せる。噂が問題化しないのはそのためだが、もしエリカが本気になって勉学にいそしめばきっと東大でだってやっていけるだろう。それは透が太鼓判を押してもいい。

　が、天は二物を与えずというか、いや逆に与えてしまった結果なのか、彼女には放蕩の癖があったのだ。大脳で考えるよりも下半身で行動してしまうのである。で、勉強はそこそこででもクリアできる大学を選んで、生活の大半を淫らな遊興に費やしているというわけだ。

　透は彼女の固い膝小僧を撫でまわした。きれいに無駄毛を処理した脛が鋭く折れこんでいる。

　「先生、責められたいんでしょう」

　ニヤニヤしながらグラスの底を透の額に押しつけてくる。濃い眉に自我の強さがあらわれている。冴えた額は知性の高さを物語り、そのあたりまでは上質のキャリアウーマンというところだが、笑うと眉間から鼻筋にかけて小皺ができて、酒席での猥談ではそれは数の子天井の名器の持ち主ということになっており――エリカに限って言えば、その通説は正解である――とくに肉厚の唇な

どはセクシーそのものといえる。知性と痴性の混在した蠱惑の美貌はとても二十二歳の女子大生とは思えないのだった。
　そしてこの身体……。眩しいばかりの豊満さ。非の打ち所のない曲線美。六本木を歩いていたらモデルやタレントや、果てはＡＶまでのスカウトに声をかけられたというのも当然であると思われる。本人は拘束されるのを嫌い、それらはすべて蹴っているそうだが、どこに出したって、トップの地位にのしあがれる素質の持ち主であろう。
　「こら、何を考えているんだ」
　「は？」
　「ボォーッとしてるよ、先生」
　「いや、いつ見てもエリカの身体はすばらしいと」
　「そのへんのオッサンみたいなことを言っちゃって。インテリゲンチャなんだからもっとそれなりの表現力でおだててほしいわ」
　「いや、それはどうかな。このデカパイの前では男なんてみんなそのへんのオッサンになり下がるだろうさ」
　「デカパイ！」
　エリカは気にいったように復唱し、上半身をゆさぶった。胸にぶらさがっている巨乳が重たげにゆれる。ブルンブルンという音が聴こえてきそうだった。誇張ではなく風圧が透の顔に届いてきた。夏美ではありえない瞬間

である。そんな瞬間がエリカといると、無数にあるわけだ。
　「デカパイ、好きか？　福島助教授？」
　「ああ、大好きだ。首っ丈だ。ぞっこんだ」
　「首っ丈？　ぞっこん？　ありふれた言葉すぎる！　文学性ゼロ！　駄目！　落第よ」　エリカは無情に決めつけると、グラスに半分ほど残っていたバドワイザーを透の頭へ浴びせかけた。
　「お舐め――」
　彼女が彼の鼻先へ突き出したのは赤いマニュキアをほどこした爪先であった。美しい足。かたちのいい指。シャンプーの香りがする。まったく不快感、抵抗感がない。
　透はまず甲にキスした。バスで湯につかったばかりというのに、そこはすでに冷えていて硬質の肌触であった。舌をすべらせ、指間をしゃぶる。親指を頬張り、たっぷりと唾液をまぶした。上目遣いにエリカの表情を盗み見ると、彼女は尖ったあごをわずかにもたげ、軽く目を閉じ、口を半開きにしていた。柿の種のかたちをした鼻孔が淫猥な呼吸をしていた。と、桃色の舌がのびて、縦皺がセクシーな美唇をなめまわした。誘惑的な仕草だ。貪欲な肉悦の享受を準備している表情といえた。
　じゅうぶんに爪先を舐めまわしたあと、透は舌を脛へと這い昇らせた。はじめて、エリカが吐息をもらした。

とくに、ふくらはぎは敏感な部分である。表にまわり裏にまわり、瑞々しい脚線美を唾液で鈍く光らせていく。
　エリカの手がのびてきて透の頭髪をつかんだ。強くつかみ、頭皮を剥がすようにひっぱる。負けじと、透も彼女のたくましいばかりの太腿の裏側を握りしめてやる。エリカの手にいっそうの力がこめられた。それは透の進出を突き放そうとするのではなく、かえって呼び込むような力だった。透は二肢を左右へ押しやり、己れの身体を股間に入れこんでいく。尻餅をつき、背をいくぶん丸めている姿勢なので、エリカの腹部には横皺ができており、臍窩がつぶれている。そしてその下に織毛の密集が盛りあがっている。ほのかな女臭が――それは汗の匂いとはまたちがう――鼻腔を刺激してくる。そっと指をさしいれ、彼女の奔放な行動の源泉といってもいい部分にふれた。夏美のそれより巨きめで、肥厚した花びらがうっすらとほころびていた。指は侵入させず、周辺をなぞりあげるばかりの愛撫に、エリカは鼻息を乱した。
　「焦らしてる……」
　「ちがうさ。たじろいでるんだよ」
　「どうしてよ」
　「食われそうで――」
　頭髪をわしづかんでいた手が頬におりてき、あごをしゃくりとった。透の目を覗き込み、エリカは微笑しながら言った。

「食いたいのはそんな細いものじゃないわよ」
　いきなり彼女の腕が首にまきつき、力付くで引き寄せた。胸の谷間に透は顔面を密着させた。巨乳に挟みこまれる息苦しさ……、そして幸福感。透は思わず武者震いして、顔を激しく左右に振りたくった。弾むような胸の山に鼻っ柱をぶつけつつ、かまわずに、貪るのである。この部分は汗の掻きやすいところだが、エリカも例外ではない。というより、彼女は汗を掻く体質なので、他の女よりも濃厚かもしれない。エリカはそれがフェロモンとなって雄を興奮させることを知っているのだ。もっとも、こんなパンチのきいたバストならどんな男でもフェロモンなしでイチコロだろうけれど。
「エリカ……ああ、エリカ……」
　喘ぐような透の痴語。彼は本当に乳ぶさに溺れているのだ。息苦しい肉のせめぎあいのなかに顔を沈め、ときおり息継ぎのために谷間から顔をあげている。
「最高だ。こんなのはたまらない」
「せっせと愛撫するのよ。前戯でイカせるくらいの気合いを入れてね」
　透は巨乳のひとつを握りしめた。手のひらから半分以上、あふれだす感じ。弾力に負けずに絞りこむ。
「あむッ……」
「痛いのか？　痛いのか？　エリカ？」
　エリカは顔を振った。艶やかな黒髪がぱっと舞い、美

貌にまとわりついた。白い歯がこぼれ、幾筋ものそれを噛みしばった。
　これだけの身体が満足するには、かなりの刺戟が必要で、扱いは手荒いと思われるほど暴力的でもかまわないのだ。それはこれまでの逢瀬ですでに知り尽くしている。知り尽くしていたが、本能的に問い正してしまうのは、やはり透が変態を百パーセント演じきれないということなのだろう。
　透はエリカを押し倒し、完全に上に重なり、本格的な前戯の態勢になった。握りしめていた乳ぶさを、なおいっそう指を食い込ませるまでにわしづかんだ。乳首がたまらず飛び出してくる。ガブリと、透は食らいついた。
　「うん――」
　エリカはのけぞる。硬起した乳頭を舌先でころがす。乳輪の表面のつぶつぶが舌腹を刺激する。柔らかく、その充血した蕾に歯をたてた。この女はこうされるのが好きで、今もビクンと裸身をいきりたたせた。チュパチュパと音をさせ、吸いたてる。エリカの呼吸がせわしなくなってくる。しきりに顔を振っている。頬がすぼめた肩について、悩ましいポーズをとっている。
　すぐに双乳は透の唾液でベトベトに濡れた。荒々しい大きな愛撫の合間に、くすぐるような小さな刺戟を挟んでやると、意外と脆く崩れていくのが今までのパターンだったが、今夜はどうだろう。透はユサユサともみたく

ったすぐそのあとに、指先で乳ぶさの底の丸みをスルスルとなぞってやった。
「ああーンッ」
案の定、たまらなくなったように、エリカは乳ぶさを自らゆすりたてた。まるで、肉丘にもぞもぞとたかってきた小蟻の群れを振り落とそうとでもするかのように。が、この小蟻は執念深く、周縁部分を這いまわっている。
「いやだったら！」
つい、声を荒げたが、これだけの奔放な行動力と知性、そして豊富な経験をもっている女が、しかも大柄な女が、指先一本だけの愛撫に歯噛みしているというのは、なかなか痛快な眺めであった。
透は指を二本に増やしてやった。左右の乳ぶさの低部のカーブをスッ、スッと掃いていく。小麦色の裸身に脂汗がにじみだしてきた。ようやく、指は中心部にむかって移動してきたが、焼け石に水といったところ。乳輪を縁取るようにクルクルとまわった。
「卑劣だわッ」
と、エリカはほざいた。けれど腕をふりまわせば取りのぞけるはずの透の指をそのままにしておくのは彼女にしても楽しんでいるにちがいないのだった。
透は隙をみて、盗みとるように、双つの乳首をつまみあげた。

「あッ――」
　激しくのけぞるエリカ。つままれた乳首をどんどん持ちあげられると、それにつれて背中も弓ぞりになりながらシーツから浮かぶ。乳首は、ゴムにようにのびる。そしてねじられ、つぶされ、先端の小さな線孔から乳液が迸りでそうなくらいに苛められる。痛いっ、とは、けっして彼女は口にしなかった。表情をゆがめてはいるものの、それは苦痛というより、痛烈な刺戟感とこれから誘われるであろう快楽の領域への期待感の、彼女なりの表現なのだ。快楽を知りぬいた身体は、たったそれだけの前哨戦でも敏感に反応して、即座に準備がととのってしまう。乳輪がほてり、ヘアに閉ざされている秘孔が開く。
　「いやらしい女だっ、エリカ！　お前はいやらしい！」
　透は浮きあがった背中に両手をさしいれ、背骨も折れよと力のかぎり抱きしめる。腹部に顔を伏せ、臍のまわりを犬のようにベロベロ舐めまわす。
　「臍なんか、いやよ！」
　エリカは大柄な肢体に渾身の力をみなぎらせて、透をしがみつかせたまま、ゴロリと横転する。上下を逆転させた彼女は、しなやかな下肢をたくみに使って、肌の匂いに狂い、熱狂的に舌をふりまわしている透の身体から離れた。

「駄目だっ、離れないでくれ！」
　透の声は悲鳴に近い。しかしエリカは彼の手をつかまえると、大の字に開かせた。頭上に白い歯が印象的なエリカの笑顔と、脂汗をしたたらせている双乳があった。透はもがきながら、その先っぽに食らいつこうとする。わずかに乳首を舐めたが、もどかしいパン食い競争のようにゆれうごき、逃げ踊るのである。
　「そんなにこれが欲しいのか」
　エリカが唾を垂らしながら叫んだ。ガクガクとうなずく経済学部助教授。
　「じゃあ、くれてやる！」
　エリカは透の頭髪をわしづかみ、あごを突き出させると、顔面に巨乳をむんずと押しつけた。豊満な肉丘がひろがりながら目鼻を圧した。胸をゆっくりとローリングさせて『乳洗顔』だ。窒息に胸を波打たせていた透だが、ふとこののまま圧死してもかまわない、という意識が脳裏をかすめた。夏美の面影など微塵もなくなっている。鼻孔に迷いこんできた乳頭にくしゃみをし、網膜を圧倒するゴム質の乳肌に涙する。
　透は反撃するように激しく噛みついた。
　「あン！」とエリカ。
　「バカ！」彼女は上体をたちあがらせると透の横っつらを平手打ちした。彼女の右の乳ぶさの側面にくっきりと歯型の痕がついている。もう一度、手刀を一閃させ

る。
　「罰としてこれをお飲み！」
　エリカは膝立ちのまま透の身体を跨ぎ越え、さらに跨ぎなおし、逆馬乗りになった。臀部が、猛々しいまでの迫力を持つ臀部が、透の顔のうえにもってこられた。
　「おおッ……」
　感嘆の咆哮はつぶれた鼻声に変化した。尻肉および媚肉がヌルヌルと粘膜をこすりつけてきた。生汗と愛液のカクテルだ。固い尻の丸み、柔軟な肉襞の感触、透は十秒に一度、呼吸するのももどかしいように顔をあげ、またすぐに埋没するとそれを舐めまわし尽くすのだ。
　エリカは透の腰に巻かれていたバスタオルを取りさった。
　「あら、今日はたいした出来だわ！」
　剛毛のなかからグンとそそり勃った肉棒を前にして、エリカはカラカラと笑う。指で弾き、カリ首をなぞり、スリットに小指の爪をひっかける。
　「や、やめろ、淫乱女！」
　透が巨臀の狭間から顔を突きだして吠えた。
　「ふん！　インポ野郎！　こんな程度じゃ、満足するのは貴様の初心な女房ばかりだぞ！」
　エリカはペニスの両側でふくれている玉嚢を握り、ヤワヤワと揉みしごく。
　「ひっ……」

　透は眦を吊りあげたが、せせりあがってきた双臀に再び顔面を制圧された。
　「フェラチオして欲しいか？　ヘッポコ助教授！」
　血管を膨張させている肉棒へ息を吹きかけながらエリカは言った。透は何度も尻のなかでうなずいた。
　「じゃ、これをタンと飲んで見せるのよ。そうすれば女王様も褒美をくれてやる」
　エリカは一瞬、腰を浮かした。焦点のぼやけた透の視点がさだまると、そこにはこちらへ向けられた女性器があり、鮮紅色の割れ目の下部にある尿道口が痙攣しているのがわかった。しかしそれにはなんの予兆もなかった。わずかな量の生暖かい尿水がこぼれだしてきた。さすがに、これは初めての経験であったが、ちっとも不潔感はない。透は顔にかかるそれを、舌をさしのべてコクリコクリと嚥下しはじめた。
　エリカもわきまえているらしく、ある程度で放尿をやめる『礼儀』を見せた。肉棒が両手で握られ、先端にこびりついていた陰毛を剥がして捨てると、大口をあけて、咥えこんだ。
　シックスナインを終えた二人は正常位で抱き合って繋がった。肌にからみついているロングヘアを悩ましく片手で掻きあげて色情にけぶる容貌をさらしあげたエリカは挟みこんだ透のペニスを締めあげながら、蕩けるような視線を彼に向けた。

　すでに一度、彼女の口中に放出を遂げている透はヒリヒリするような疼痛を感じつつ、懸命にエレクトさせて腰を動かしていたが、やはり劣勢は免れなかった。旺盛な若さと、横溢する性欲の塊である多情な女子大生に、男盛りとはいえ、中年期にさしかかった男が連続で対するのは大変なことだ。しかもエリカはグラマラスボディの疲れを知らぬ体力の持ち主である。が、透にとってはそれが嬉しくてならないのである。
　彼女の誘惑的な視線に乗じて、キスをねだったが、あっさり顔を背けられた。
　「うう、エリカ。優しくしておくれ」
　エリカはプッと吹き出す。
　「先生、情けなさすぎるわよ」
　「だって、お前」
　「だ、か、ら、それじゃ、コールガールに翻弄される成り上がりのハゲ社長じゃないの、まるで」
　透のあごを撫でてやりながら、乳ぶさを押しつけるエリカ。
　「本当にお前は悪い娘だ」と透は言った。
　「落第させて、もう一年、教育しなおさないといけないな」
　「フフフ、また一年、私にしゃぶられる気？　それじゃ、あんまり奥さんが可哀相でしょう」
　「女房のことは言うな。もうとっくにさめきっている

んだから」
　「嘘ばっかり。さっき舐めたら奥さんのアソコの味がしたわよ」
　「まさか、お前、そんな……」
　「この三日以内にやったでしょう？」
　「ん？　しかしあれは毎晩、同じ部屋に寝ていると、義務みたいなものさ。まずくても、メシは食わないわけにはいかんだろ」
　「言い訳がスラスラ出てくるところを見ると、前から準備していたのね。男って、ホント、いやらしいわ」
　エリカは化粧の落ちた素の顔――やはり若いだけあって、ちっともメイクアップされた顔と遜色がなかった――を皮肉っぽくゆがめながら透の鼻頭を舌先でなめた。
　透は作戦をかえて乳ぶさを攻めはじめた。女は自分の最も魅力的なポイントを意識しているものなので、即、最も鋭敏な性感帯になりやすいものなのだ。エリカはなぜか否定するのだが――これほど聡明で積極的な女でも、女子校生のように巨きすぎる胸にはコンプレックスがあるのか、絶対にバストを弱点だとは認めたがらない――これまでの経験からして乳ぶさが攻略の起点となるのははっきりしている。
　汗ばんでヌルヌルする肉丘を親指と人さし指の又に挟んできつめに絞りあげる。そして片手を腰にまわし、自

分勝手にうごめいている腰を力づくでこっちのペースにあわせようとする。
　エリカは嘲笑した。ヒップをダイナミックに振りたくると透の意図をくじくように手をはらいのける。乳ぶさに食い込んでくる指を器用に抓りあげ、悲鳴をあげさせた。強靭な収縮力で透の度胆をぬかせると、まず彼を押し倒し、腰を持ちあげてペニスを吐き出す。そしていきなり陰嚢をつかむと強い力で握りつぶした。
　「イタタタ……」
　透は股間を押さえて身体を丸くした。
　素早く立ちあがったエリカは汗まみれの全裸の、どこも隠そうとせず、胸を張って、肩を怒らせるような女子テニス選手のような歩き方で部屋の隅に向かう。彼女がとりあげたのは洒落たブランド製のバックであり、なかから取り出したのはまるでそぐわないＳＭのための道具類であった。
　ＳＭといってもハードな、ドロドロとしたものではなく、ソフト、あるいはライト感のある今流行の線であった。それはファッションセンス溢れるデザイン――クロームの材質の腕輪のような――の手錠であったり、身体にほとんど苦痛を与えないと思われる裂き割れした鞭、あるいは革製の目隠しなどである。
　『玉つぶし』に七転八倒している透に馬乗りになると、簡単に腕を背中にねじあげ、手錠を手首にはめた。

「あっ、なんだ、お前！」
　唖然としている透を尻目にエリカはもう片方の手も背後に取りあげて、さっさと手錠で拘束してしまった。
「おいおい、こいつは……」
　かすかな、こわばった笑みを浮かべたが、エリカの表情が少しも悪びれていないのを知ると、透は焦燥を強めて施錠された両腕を藻掻かせた。むろん金属音を響かせるだけで行為は徒労におわった。
「こんなのいやだよ、エリカ」
　惨めに哀声をあげた透だったが、有無を言わさずその顔に目隠しがかぶせられた。暴れる顔をものともせず、後頭部のところでバンドを締めつけてしまう。
　手の自由と視界を奪われた透はベッドに座り込んでいるしかなくなった。ベッドのうえに仁王立ちしたエリカが非情にも彼の肩を蹴り飛ばした。
「や、やめてくれ！」
「ふん、何がやめてくれ、よ。乱暴に女の身体を自由にしようとした罰じゃない。じっくりと嬲りものにされる悲哀を味わうがいいわ！」
　さらに透の尻を蹴飛ばし、あおむけに転がすと、まだ自由を許されていた足に今度は足輪をハメようとした。それには鎖がついており、ベッドの脚へ巻きつけてしまえばついに下肢もだらしなく開けきったまま拘束されてしまうのである。

　エリカは君臨するサドの女王さながらに両手を腰について片足を透の腹部にのせた。柔らかなその部分をジワジワと踏みつけていく。
　「やりすぎだぞっ、グエッ……赤点だからな。落第させてやるぞ！」
　「おっ、立場を利用して圧力をかける気ね。いい度胸してるわ！　お仕置きよ！」
　なんとも滑稽なことに、彼のペニスは勢いよくそそり勃ったままである。エリカは爪先でそれを弾き、わめき散らす透を怯えさせると、しゃがみこみ、淫具の山のなかからゴムのチューブをとりあげた。
　「これじゃ、ティーンエージャーみたいね。少し去勢したほうがいいんじゃなくって」　「お、おい、何をする気だ。馬鹿な真似はよせよ、おい……」
　不吉な気配を悟った透はふと深刻な口調に変わって言った。
　エリカの長い指が肉棒をつまんで根元をさらす。ゴムをしごきながらその部分へ何重にも巻いていった。そして結び目を作り、きっちりと締めあげる。
　「おおおおーっ――」
　透はのけぞりながら苦痛――というべきなのだろうが、それを通りこした肉美みたいなものも同時に感じてしまう――に金切り声をあげ、両足をガクガクとふるわせた。

　根をくくられたペニスは桃色の亀頭をさらに充血させ、血管も異様に浮きあがらせて、今にも破裂しそうな風情を見せつけている。
　「諸悪の根源が懲らしめられてる図ね。いい気味だわ」
　彼女はしばし巨大化したそれに見惚れていたが、今度は羽毛を持ち出してきた。もし透が目撃していたら、声をかぎりに助けを乞うたであろう。戒めを施されているペニスにそんな悪戯を仕掛けられたらどうなるか、男だったらすぐに予測がたつに決まっている。
　「さあさ、この女王様は厳しいだけじゃないよ。男奴隷を優しく慰めてあげる度量ももっているんだ。よーく感謝するんだね！」
　声色をそれ風につくり、ペロリと舌先で舐めてやると、エリカはやおら羽毛を肉棒の血管にそって這わせはじめた。
　透の惨めな悲鳴が噴きあがった。彼の悩乱ぶりは、教壇に立って学生の居眠りをさそう授業を生真面目にしている彼を知っているものにとってはまったく信じられないものであったろう。くすぐりに腹の底が浮きあがるような感覚をもたらされて涙を噴きこぼしたかと思えば、ほてりにほてった神経繊維を巧妙に弄ばれる悲痛にあられもない声を発し、あるいはその逆に淫らなそそのかしに負けたように、さらなる強烈な刺戟を求めるが如く、

懇願の声を上げたりもする。
「死ぬぞ、エリカ！　ああっ、駄目だ。死んじまう！」
「狂いそうだ。これ以上、されたら気が変になるよ！」
「あああああっ、そのまま噛みついてくれ！　頼むからもっとメチャクチャにしてくれ！」
羽毛の先がペニスの裏側をなぞりあげてくると、透の苦悶は最高潮に達したようだった。エリカは彼の異様なほどふくらんだペニスを見ているうちに、しだいに自分の媚肉も熱っぽくなり、潤んできたのを感じた。四肢を拘束され、視覚も奪われた男の身体はどこか物質と化し、肉の塊という雰囲気だったが、だからこそ隆々と勃起しているペニスだけが生命力を集中させて猛り狂っている様は何か別の生物に転化してしまったような錯覚を感じさせた。ペニス型のエイリアン。ペニスだけに集約された命。不倫と淫行を重ねる二人の関係の暗喩のようでもある。おそろしく牝の本能を刺激する眺めなのだ。
先端のスリットからはしつこいくらいに先走りの液体が溢れている。美味しそうな蜂蜜だ。見惚れているうちに頭がボォーッとしてきた。鼻のしたにいっぱい汗の雫をためて、目元を赤らめながら、エリカはフェロモンに惹かれていく蝶のように、ふっと唇を近づけていった。口づけは透を絶息させた。そしてエリカの媚肉をうずか

せた。何がいいといって、どれほどの積極的な手淫、口淫をほどこしたとしても、こちらがゴムチューブを解いてやらないかぎり、彼が果ててしまう心配がないということであった。その権利をもつ優越感はエリカのような女にはたまらない魅力だった。男を征服できる。男の生理を自由に管理できる。これこそが究極の女性上位に違いないのだ。男の気分に左右されず、自分がイキたいときにあわせて放出させられるのだ。唇から淫液をしたたらせながらエリカはまるで毒婦と化した顔つきになる。自分をこれほどまでに満足させられる環境は、やはり透のようなインテリのキャパシティがなければとうてい望めない。彼女の同期の男子学生などはまるで失格だし、そこらで釣り上げられるような金をもてあましたどこぞの社長も問題外だろう。彼らは一様に暴君になりたがるのだ。インテリこそ、ハクイのである。福島助教授は格好の愛人といってよかった。

濡れそぼった彼の陰毛を掻きまわしながらエリカの小麦色の美貌がシャフトを口中にして上下する。頭髪が横顔にかかるたびに耳のうしろに跳ねあげて、淫らな相を露呈させ、目元と頬骨の辺りを見せつけた。

ヒィヒィと泣く透。甘美な刺戟とそれを解消できぬ思いの多大な増幅に慌て、うろたえ、混乱する。夏美とは比較することも馬鹿馬鹿しいほどの超絶的な技巧が、戒めをほどこされたペニスへ与えられつづければ、たとえ

ば空気を入れつづけられ、ふくらませつづけられる風船を顔の前にした恐怖感と同様の感情が沸き起こるのである。まさに肉の風船である。
　ペニスが破裂する――、笑止千万な現実が混乱する透の頭にフラッシュバックするのである。
　己れの唾液と透の前液に口のまわりをギトギトに濡らした変態女子大生が顔を起こした。透は目隠しのために見られなかったが、エリカの顔の淫乱なことといったらなかった。垂れた乳ぶさもまたひとまわり巨きくなった感じである。
　彼女は立ちあがり、透の股間を跨いだ。開脚し、腰を低くしていくと、そそけ勃った黒毛のなかに鮮紅色のヴァギナがパックリと割れている。耳までさけた魔女の口さながらに。
　「おおおおっ――」
　貪欲な吸引力と把握力をもった、ずっしりと応える媚肉がまとわりついてくると、透は年甲斐もなくわめき散らした。強烈な肉悦の刺戟と、被虐の恐怖とが、からみあいながら透の理性を狂わせる。
　呑み込まれていく……。
　「凄いぞっ、エリカァァァーッ」
　エリカは体内を貫いていくペニスのかつてない逞しさに天井を向いた。腰は完全に落ち、豊満な双臀がぴたりと透の股間と密着した。左右の膝が大きく離れている。

筋をピリピリと痙攣させている内腿の付け根にプッと膨張した男根を咥えこんで、下腹部を嬉しげに波打たせている。
「ああ……イイわっ……これはたまらないわっ」
エリカも髪をふりたてて口走った。ロングヘアの毛先が乳首をかすめ、深い胸の谷間にすべっていった。
「早く、早くゴムをといてくれ！」
必死に哀願する透。インサートした――された？――時点ですでにもう昇りつめそうになっているのだ。
「まだまだ、まだまだよっ」
エリカは魅力的なヒップを動かしはじめた。緩めては吐き出し、呑み込んでは締めつける。あるいはひねりを加え、回転を加える。
「ヒッ、ヒィィィーッ……」
透の悲鳴を心地よく聴きつつ、エリカは至福の微笑みを浮かべていった。長い腕が自らの胸へまわされた。たっぷりと丸い乳ぶさをつかみ、愛しげに揉みはじめる。ゆっくりとかたちを変えていく双乳。燃える色情が全身をつつんだ。汗ばんだ美貌のこめかみの血管が浮き立ってきた。濃い眉の尻が垂れさがり、小鼻がふくらんだ。ぽってりと肉厚の唇が縦長に開け放たれた。真珠色の歯並びを、そして下唇を、桃色の舌が舐めまわす。
左右の乳ぶさをひとつに押しつけ、そのまま揉みあわし、乳首を爪でえぐりまわした。すべての刺戟が思った

とおりに官能を高めている。雄を組み敷いてのセックスにおいて、無限の自由を感じるとき、エリカは幸福だった。すべてがうまくいき、完全にコントロールされた快楽が享受できるときにだけ、彼女は女の悦びを感じることができる。エリカはそういう女なのだ。
　乳肉をこねまわしていた手が股間におりていった。腰をやや浮かしかけ、ペニスを半分ヌルリと露出させると、その根元に指をもぐらせていった。ゴムチューブの結び目をさぐり、先端をつまむと、ほどいていく。
　歓喜の咆哮が透の口から放たれた。存分に抑圧されていた肉欲が一気に迸らせるときがきたのだ。
　田淵エリカの子宮は爛れた口を開けてそれを待っていた。

　　私たちの愛した男

　Ｋ女子大学経済学部、福島透助教授の葬儀は自宅近くの区民センターでしめやかに営まれていた。
　享年三十六歳。その早すぎる死は自動車事故によって突然訪れた。彼の運転していた車が対向車線にはみ出し、走ってきたトラックに正面衝突したのである。即死。警察は現場の道路にブレーキを踏んだ跡がないことなどから、透の居眠りかわき見運転が原因と断定、処理

をすすめているようである。
　報せを受けた田淵エリカはむろん茫然自失で立ちすくんでしまうほど驚愕したわけだが、と同時に残された彼の妻、夏美のことを思うと激しく胸が痛んだ。透の閨での言動を聞くまでもなく、夏美が透にどれほど惚れぬいていたか、わかっていたからである。良心の呵責も感じないわけにはいかない。透との不倫の関係が仮に透のほうがより強くエリカに溺れていて、求めていたものであったとしても、愛人として彼の身体を、彼の心を、夏美から奪っていたという事実は軽くなるものではないのだ。
　ツーピースの喪服にグラマラスで大柄な身をつつみ、福島ゼミの仲間たちと一緒に告別式へ向うエリカはほとんど会話には加わらずに電車の窓から見える景色に視線をやっていた。
　葬式に参列すべきかどうか、最後まで悩み、迷った彼女であったが、たちがたい透との思い出に区切りをつける意味でもやはり欠席するわけにはいかない。とても、夏美の顔を直視できるとは思えなかったが、その苛烈な呵責の心だけでも味わわねば、罪の意識に一生苦しめられそうだった。エリカほどの奔放で自由な精神の持ち主であっても、死は何よりも重いものであったし、不倫は後ろめたい影をひきずっている行為だったのである。
　駅におり、葬儀場へ歩く道すがら、友人の一人が暗い

雰囲気に耐えきれなくなったように口をひらいた。
「……奥さんはどうするのかしら。賠償金も莫大なものなんでしょう？」
その話題は誰もがさけていたが、誰もが関心のある点であった。それでも、「アヤコ、こんな時に不謹慎よ」とたしなめられると、その娘は、だって、と言ったきりハンカチで目頭を押さえた。
女子大生の喪服姿の一団は道ゆく人たちの関心をひいていた。駅前の旧い商店街のくたびれた男性店主たちは、やや青ざめた若々しい顔と喪服のもつしっとりとした魅力との対照に好奇の興味をつのらせ、露骨な視線をあびせてくる。
とくにその集中するところとなったのは、いま流行の茶色の髪の混じった、モデルのような美貌の女である。喪服がこれほどまでに身体のプロポーションを強調するものだったかと、改めて思うほど、その女は胸も腰もグングンとボリューム一杯であった。ハーフ顔の彫りの深い表情は憂いと疲れで痩れていたが、小麦色の肌が腺病質な印象になるのを救っていた。
それにしても、あのおっぱいと尻の巨きさときたらどうだろう。そして黒のストッキングにつつまれたふくらはぎのムチムチぶりは……。一度でいいからあんな極上の身体を抱きしめてみたいものだ。それも喪服を一つひとつ、脱がせながらであればどんなにか感動的であろう

か。八百屋も魚屋も肉屋も、思いはみんな同じである。
　彼女たちが区民センターに到着し、記帳をすませて会場におもむくと、すでに福島透の親族や友人、そして大学の関係者などが席に座っていた。
　正面に菊の花が埋まったステージがあり、その中央に福島透の遺影がおかれていた。聡明そうな笑顔、日焼けして白い歯がこぼれている。気の弱い友人の中にはそれを目にしただけで新たな涙にくれるものがいた。
　エリカも胸に熱いものがこみあげてきたが、ぐっとこらえた。なぜか、自分はここでは泣いてはいけないのだという強迫観念にとらわれていたのだ。罪のあるものは人前で人と同じく感情を表出させる権利はないような気がした。暗い部屋で一人で惨めに涕泣するのが、その罪の報いであるのだ、と……。
　最前列にチラリと黒い和服を身につけた小柄な女性が座っているのが見えた。エリカの心臓がとまりそうになる。夏美にちがいなかった。エリカは一度だけ彼女を見たことがあった。透のマンションでゼミの新年会をむりやり開いたときだった。夏美は落ち着いた女性で、終始ニコヤカに料理などをもてなしてくれたものである。その時はまだエリカは透との交渉をもっていなかったので、素直に奥方の品のよさと素直さに好感を覚えたはずだ。
　今や、すべては変わってしまった。夏美にあの時の笑

顔はない。これからの人生でもけっしてああいう笑みは生まれないのだろう。膝に置いた両手に握りしめたハンカチを見つめるように、彼女はガックリとうなだれていた。うしろにまとめている黒髪からほつれ毛がひと筋、ふた筋、蒼白の横顔にかかっていた。涙がポタリポタリと落ちてくるのをエリカはみた。美しい涙だと思う。夫を一心に愛しつづけてきた妻だからこそ流せる涙なのだ。自分との決定的なちがいを見せつけられて、エリカは暗然とする。

葬儀はしゅくしゅくと進められていった。最後に列席者が中央へ順番に献花する段が訪れた。大学のお偉方が若すぎる未亡人にたいしてお悔やみをいい、頭を下げ、花を透の遺影の前に投じた。

夏美は親類の者に傍らをささえられて辛うじて立っているといった痛々しい姿だった。自分の順番が近づいてくると、エリカは逃げだしたいような落ち着かない気分になってきた。なぜだが、夏美が二人の不倫の関係をすべて見通していたのではないかという、理由のない疑念が胸を衝いてくるのである。透の偽装工作は完璧であり、夏美の絶大なる透への愛がこの場合は彼女を盲目にしているはずであり、事実が露呈していることはまず考えられない。

が、告別式の最中の悲しみにうちひしがれている彼女の姿を見ているうちに、理屈を越えた『何か』をエリカ

は感じてしまったのだ。愛する人に死なれて、悲しみのあまり一夜にして白髪になったとか、失明してしまったとか、極度の悲哀にまつわる超自然現象は枚挙にいとまがない。透を失ったショックで夏美に透視能力――というか、嗅覚のようなもの――が備わり、自分を目にするや不貞の匂いを察知し、突如、優しげなあの美貌が般若の形相に変貌して、激しく指弾されるのではあるまいか。

『おまえが透を奪ったのだ。おまえが透を殺したのだ。こんなところによく顔がだせるな。私の姿をみて笑おうというか。鬼め、売女め、あばずれめ――』

彼女の悪罵が聴こえてくるような気がした。エリカは渇いた唇をなめた。こんな時に涙ではなく脂汗を拭っているところが、正妻と愛人のちがいなのだろうかと、考えたりする。

いよいよゼミの学生の順番がきた。

夫の最愛の教え子たちの顔を見ると――正月には会っていたこともあってか――夏美の悲しみはいっそう深くなったようだ。ハンカチを目にあて、嗚咽を高めた。痩身の色香、というものが存在するなら、まさに目の前にいる夏美がその名に値すると思われた。どんな男であっても黒の和服の胸もとから覗けているあの白い肌に目を吸い寄せられない者はいないだろう。襟元から匂い立つような美麗で繊細なうなじに心を奪われない男がいると

は思えない。黒のツーピースと同じように黒の和服もまた丸い女の身体の線を浮き立たせる。そっと抱きしめたいような小さな肩。なだらかな胸。まろやかな腰。どれも男心を挑発するシルエットである。
　葬儀のときの未亡人が美しいのはその時が最も純粋に愛する人を求めているからであり、それは表面に滲みでてくるものなのだ。例の強迫観念とともにその美しさが接近してくると、エリカは足の運びがこわばってさえいるのである。
　とうとう、愛人は正妻の前に相対した。喉がからからになって声がでてこなかった。一瞬、夏美は上背のあるエリカの顔をみあげ、かけられるであろう言葉を待った。
　二人の正反対の魅力をもった美女が見つめあっている姿を列席していた男たちは固唾を呑んで見守った。まったく、葬式などは女性の喪服姿を盗み見て楽しむ以外に時間のつぶしようがないものなのだが、今回はそういった面では恵まれているといってよかった。なにしろ故人が女子大の教員ということで、学生たちが大勢きている。加えて奥方が男好きのする美人。いつもならイライラするほど長く感じる式の進行も今日は短く感じるくらいである。そして――
　学生のなかでも目立って魅力的な娘と、その未亡人のツーショットはまさによだれの垂れてきそうなほど、美

味しい場面ではないか。これほど対照的な美をもった二人も珍しい。色白で小柄な純日本風の和服美人と、健康的な浅黒い肌と躍動的なロングヘアをもったプロポーション抜群の『ギャル』だ。あんな二人を一度に抱けたら、どんなに快楽的だろうと男たちは想像力をたくましくする。

　そんな男の夢をあっさりかなえていた男がおり、それがあの菊の花に囲まれている当の本人であることを知ったら、この会場にきている男たちのなかで、いったい何人が真の意味でのお悔やみを口にできるであろうか。

　「……こ、この、たびは……」

　もつれながら、エリカは辛うじて言葉を繕っていった。想像した突飛な予感など起こらず、夏美は青ざめた顔を伏せて無言でお辞儀をする。

　全身、汗でぐっしょりになりながら、どうにかこれですんだと思い、エリカはその場を立ち去ろうとした。しかし、足を止めた。ふと、夏美の身体がクラッとゆれたような気がしたからだ。

　（眩暈でもしたのだろうか、私……）

　そう思ったが、ちがった。夏美の顔が血の気を失っているのに気づいた。あっ、思うまもなく、彼女はエリカのほうへ身体を倒してきたのだ。

　「貧血だっ」と、誰かが叫んだ。エリカはハンカチやハンドバックを投げ捨てて夏美を抱きとめた。すでに力

は蒸発し、体重を思い切り預けてくる。
　ざわめきが場内に走った。
　「大丈夫。お疲れになっただけですわ。少しお休みになれば。このまま控え室へ――」
　エリカは夏美を抱きとめたまま落ち着いた声で言った。親類と思われる男が手をのばしかけたが、エリカはしっかりしているし、隣に数人の女子大生たちが手助けしているので、任せたほうがよしと判断したらしい。彼は控え室の方向へ先導した。
　自分の腕のなかで、まるで自分を信頼しきったように――もちろんそんなことはないのだが――抱かれているのが一人の男を同様に愛していた女であるという事実をエリカは複雑な思いで受けとめている。この体重を透は腰に乗せて悦ばせていたのだと生々しく実感される。
今、エリカは彼女の腋の下から手をさしこんで、胸にまわしてしっかり抱いているのだが、和服の生地のしたの生身の肉体の柔らかさが感触として手に伝わってきているのをはっきりと悟っていた。
　透は自分の乳ぶさを愛撫しながら、しきりに妻のそれの小ぶりさを憂いてみせたが、エリカにはそれが好ましいほど標準サイズのものに思えた。自分の機嫌をとるためにことさら誇張していたのだろう。あるいは、自分の自慢したいものを自虐的に矮小化することによってかえって相手に意識させようとする、大人気ない手管だった

のかもしれないと思った。苛烈なジェラシーがエリカの身内に沸き起こる。ようするに、透が愛していたのは自分ではなく、夏美だったのか……。

この章の残りは有料本編でお読みください。

私の愛している探偵ごっこ

何日も、田淵エリカは気の抜けたような生活を送っていた。
大学へも行かず、自分のアパートに引きこもり、重厚なクラシック音楽ばかりをステレオでかけて聴いていた。マーラーとかワグナーなどがターンテーブルで回っている。
この喪失感はじつは意外なほど大きなものだった。たしかに福島透はエリカにとって最も愛する男性のうちのひとりであったわけだが、しかし唯一ではなかったし、生涯、本気で共に暮らしていこうと考えていたわけでは決してない。熱烈で、高尚な遊戯のひとつにすぎないと、彼とベッドをともにしているときも思っていたはずである。

なぜだろう――
それなのに透を失った今、自分を覆っているこの憂欝は深く厚い靄のようにいっこうに晴れようとしないまま、自分を立ち止まらせている。
あの告別の日の福島夏美の姿が、エリカに大きな影響をもたらしたのは事実かもしれなかった。人生の絶望をうたいあげるオーケストレーションが壮大にフィナーレを響かせおわったとき、訪れたしばしの静寂の中でエリカの心に浮かんでくるのは、あの時の夏美の憔悴しきった表情であることが多かった。その映像は彼女を怯えさせ、責め苛んでくるのである。もう、どうしたって、取り返しのつかないことであるのに、彼女は何度も思考の堂堂巡りを繰り返している。過去を断ち切って、将来への一歩を踏みだすのには、どうすればいいのだろうか？すべての秘密を打ち明け、夏美の許しを乞う以外、それは到底かなえられるものではないだろう。が、不可能な話である。その時の、夏美の驚愕と絶望を考えれば、人間のやるべきことではありえなかった。そしてエリカの堂堂巡りは出発点に立ち戻ってくる。
時が解決してくれるのを待つしかない……
日も高く昇った頃、浅い眠りから目覚めたエリカはベッドのうえで煙草に火をつけ、バサバサに乱れた髪をかきあげた。静けさは心を怯えさせる。リモコンを操作し、ＦＭをつけた。バロック音楽のゆるやかなカノンが

麻薬のように心を落ち着ちつかせてくれる。
　彼女はシーツのうえに豊満な身体を全裸で投げ出していた。怠惰な生活を何日もつづけているというのに、その肉体は少しも衰えをみせてはいなかった。精神的な苦悩や不規則で偏った食生活も、彼女の若さがすべて弾き飛ばしているといったところだ。
　加えて、これほどまでの長期間、男なしの生活がつづいたのは、大学に入学して初めてのことかもしれなかった。『休息』が肉体に力をみなぎらせつつある、そう診断すべきなのかもしれない。ノーメイクの素っぴんが瑞々しさを取り戻しているように見えるのは、それまでの、荒淫とはいかないまでも、多情なセックスライフが、本来のあるべき健康的な魅力を抑圧していたのかもしれなかった。
　エリカはパンにハムとチーズをはさみ、コーヒーで胃に流し込んだ。閉じたままのカーテンを久しぶりに開けようと思い立ったのは、窓の外で小鳥のさえずりがしたからだ。いや、今までだってさえずっていたはずだが、耳を通りすぎていたのであろう。ようやく精神状態に余裕ができたのかもしれない。
　アパートの二階の窓から心地よい陽光がさしこんできた。ヘアまでさらした裸体をのぞかれる心配をするような女ではなかった。小麦色の肌がいっぱいに輝いた。全身のうぶ毛がそそけたち、背中をおおっているロングヘ

アをきらめかせた。
　頭上に両手をかざし、そこでひとつに組んだ。爪先で立って、大きく伸びをする。凝り固まっていた身体中の疲れがバラバラと剥がれ落ちていくようだった。
　エリカはまた久々にシャワーを全身に浴びたい気分になった。
　バスタオルを身体に巻いたエリカはバスルームを出ると、ベッドのうえに胡坐をかき、その前に電話をどすんと置いた。住所録が内蔵されるタイプでエリカは液晶表示をスクロールさせながら目的の番号を発見する。名前はイニシャルだけ。Ｔ・Ｆとあった。
　福島透の電話番号だった。そこを確定ボタンで抽出する。自動的にプッシュボタンが作動した。が、通話不能の文字が表示された。何度か繰り返したが、同じである。エリカは洗い晒しの髪をゴシゴシ拭きながら思案し、そして苦笑する。モジュラージャックが外されていたのである。ここ数日、電話に出るのも億劫だったので、ひと思いに抜いてしまっていたのだった。
　付け直し、改めてアクセスする。つながった。コールが何度もなった。
　（留守？）時間的にはそうであっても不思議ではない。しかし愛人の自分がこれほど落ち込んでいるのだから、さぞや夏美の消耗は激しかろうと、思い込んでいたのだ。外出など、まだまだできる状態ではないのか

と……。
　（電話にも出られないのかな。それとも親類の家に一時避難しているとか……）
　様々な理由が浮かんだが、執行猶予をつけられた気分でもあった。夏美に電話をし、話をして許すなら会って勇気づけようと思ったのだが、それはそれで心軽くというわけにもいかないことではある。
　（明日にするか……）
　受話器を置きかけたとき、突如、コール音が途切れた。
　「ハイ、どなた？」
　不機嫌そうな声が流れてきた。中年の女の声だ。夏美よりは年代が上だし、品がない。別人である。
　「……あ、あのぉ、福島さんのお宅でございますでしょうか？」とエリカ。
　「そうですけど、そちら様は？」
　こちらが若い女性であることに気づいて、電話の声はますます横柄な様子をつのらせてくる。
　「失礼しました。私、生前、福島先生にたいへんお世話になりました田淵という学生でございす。奥様の夏美さんはご在宅でしょうか？」
　「学生？」
　語尾を尻上がりにさせるキンキンとした声だ。エリカはイライラする。

（バアサン、早く代わってよ）
「あんたの名前は？」
「……ですから田淵と申しますが……」
「なに言ってんだよ、それは姓じゃないか。私の聞いてるのはね。名前だよ、名前。田淵花子とか、田淵カメ子とか、人間なら下の名前があるだろうさ」
失礼しました、とまた謝りながらエリカは腹を立てる。腹を立てたと同時に疑念がふつふつと沸いてきた。この無礼な女はいったい何者なのだろう。夏美の親類縁者にこのたぐいの人間がいただろうか。エリカは告別式の家族の席を思い浮べた。それに該当する人間は探しだせなかった。断定はできないが、夏美の人となりを育んだ家庭環境にはそぐわない人種のような気がする。友人ということはますます考えられない。上質な中産階級に属する助教授夫人が付き合うようなタイプではなかろう。
「あんた、何を黙っているんだい？　どーも、怪しいね。ホントに学生かね。まともな学生ならこんな時間は大学に行ってるはずだよ」
「今日は授業がない日なのですっ」
エリカはピシャリとさえぎり、こちらの嫌悪感をあらわに伝える。
「私は本物のＫ女子大学学生で経済学部三年の田淵エリカといいます。お手数ですが、福島夏美様にお取次く

ださいませ！」
　「えりか？　へんてこな名前だね。どんな字を書くんだい？」
　「……カタカナですわ……」
　「あいの子かね、あんた？　まともな日本人の名前じゃないだろ」
　エリカの声が大きくなってくる。眦がつりあがってきた。身体に巻いたタオルがはずれて、大ぶりの乳ぶさが露出する。
　「残念ながら、純粋の日本人ですわ！　ところでお忘れになっているようですが、奥様にお取次を！」
　受話器の向こうでしばし沈黙があった。手でマスクしているらしく、どういう状況なのかはわからない。誰かと話をしているのだろうか。
　「それで――」中年女の声が戻ってきた。「そっちの住所は？　それと電話番号を教えなさい」
　「どうしてそこまで必要なんですか！」
　とうとうエリカの辛抱が切れて声を荒立てた。
　「ヒステリーかい……」
　女はクスクスと含み笑いをしているようだった。
　「違いますっ。奥様はいるんですか、いないんですか、いったいどっちなんです！」
　「うるさい娘だね。鼓膜が破れちまうじゃないか。礼儀を躾けられていないようだね。人にものを頼むときは

もっと低姿勢でなけりゃいけないよ」
　女はまた不愉快な喉奥での笑いを響かせた。
　「夏美はね。まだずいぶん神経質な状態なんだよ。そんなときに、あんたみたいなどこの馬の骨ともわからない、情緒不安定の若い娘と話をさせたら、いっそう混乱してしまうからね。今は遠慮してもらうよ」
　「……あなたは何者なんですか？」
　「あんたの住所と電話番号が先だ」
　女は絶対に引き下がろうとしない。条件にのってみようかとも思ったが、不吉な予感もよぎったので、ここは退却することにした。もんぎり型の礼をいい電話をきった。
　女の正体に対する疑問よりも、エリカを心配させるのは夏美の容態である。電話に出られない状態であることだけはたしかなのだ。心身面に問題があるのか、それとも何らかの理由で自由を制限されているのかは別にして……。そしてその両方ともに、エリカには放っておけない事態であるに決まっていた。
　エリカはまず何より、夏美本人に会って、話をしてみるべきであろうと結論した。それが最も今やるべき行動であるにちがいないし、夏美自身も自分につよく会いたいと思っているのではあるまいかと、なぜか胸騒ぎしたのである。
　目標が設定されると、人の目はイキイキとしてくるも

のである。
　髪をとかし、ルージュをぬり、チョーカーを首につけた。ブルーのブラジャーとパンティを身につける。ぶらぶらしていた巨乳をカップに押し込め、ストラップで吊り上げると、気持ちが快適な緊張感を覚えた。
　服を選ぶ。黒の半袖Ｔシャツに、ジーンズだ。なぜか、活動的なほうがいいと思った。ヒップがパンパンにふくらんでいる。ウエストにベルトをしめ、ファスナーをジリジリと引いた。パンティのフロント部の淫猥な隆まりがしまわれる。時計をし、財布をポケットにつっこみ、スニーカーを履いた。
　自分はやはり生きていくんだな、とエリカは身内でつぶやく。皮肉なことに、愛人の死で失った希望を、その妻によって取り戻すのだ。
　顔にかかった黒髪を肩の向こうへ跳ねあげ、扉を開ける。久々の外出だ。自分が新たな人生に向って歩んでいくような勇ましい感情を覚えた。

　福島夏美の住む家は閑静な住宅街にあった。
　この辺は古くから開けていたところであり、歴史に裏打ちされた落ち着きと品のよさが生きている。東京には珍しく雑木林が残っており、高級なイメージを漂わせていたが、伝統的に学者や知識人の住居が多く、やがて若い世代へ代貸ししていくということも普通のようであ

る。
　福島透もその口で、恩師の住んでいた家をそのまま引き継いでいたのだ。でなければ、女子大程度の給料ではこんな場所に住めるはずもないのである。
　エリカは一度訪れたことがあったとはいえ、日が経っているし、あの時は大勢であったので道順はうろ覚えであった。運よく掲示板が見つけた。福島の文字を捜しだし、辻々を確認する。
　家が近づくにつれ、おぼろげだった記憶が鮮明になってくる。ほどなく、二階建のこけむした瓦屋根をふいた福島家が見えてきた。
　壁には蔦が這っており、ひっそりと、どこか幻想的な感じのするたたずまいといえる。
　さて、いよいよ来てはみたものの、エリカにはこれからどうしたものか、考えが整理されているわけではなかった。当然、あの得体の知れぬ中年女がいると思わねばなるまい。彼女がすべてをとりしきっている以上、通常のやり方で夏美に面会を申しこんでも、拒否されることになるのではなかろうか。
　名前や目的を偽って接近する？　しかしこのなりではセールスレディにはちょっと見えない。それに声がバレてしまっている。
　（どうしようか……）
　エリカは福島家の門柱の間でしばし立ち止まってしま

った。
　（しょうがない。イチかバチかだ）
　彼女は性格である思い切りの良さで決断し、正々堂々、正面突破を試みることにした。あの女が不在の可能性だってあるだろう。
　門から玄関までの小径に布かれた飛び石を踏みしめる。それにしてもひっそり閑としている。物音がしない、だけでなく、人の気配が感じられないのだ。
　エリカは玄関先に立ち、呼び鈴を押した。インターカムの応答を待つ。ノイズが聴こえ、ついで、声がした。
　「どなた……」
　アルコールに焼けたと思われる、しわがれた女の声。底意地の悪さが露骨にでている、あの中年女の声だ。
　（やれやれ――）エリカは失望したがもうあとには引けない。意をけっして名を名乗った。
　「私、田淵エリカと申します」
　インターカムの向こうで、しばし沈黙がつづいた。突如、扉がひらいた。エリカはギクリとして一歩退いた。
　姿を現したのはまさに大女であった。百六十六センチのエリカよりも頭ふたつは上背があると思われた。

この章の残りは有料本編でお読みください。######

私の愛している職業

『原ひろ子法律事務所』は霞が関に近いオフィスビルの三階にあった。
小綺麗なフロアの奥がそこだ。
田淵エリカは事務所のいくつかある応接室のひとつに通され、原弁護士と膝つめで話をしていた。
「無茶するわね、あなたって……」
呆れたようにひろ子は苦笑した。いかにもやり手といった鋭い目つきを眼鏡の奥に光らせている女性弁護士は、一度、福島ゼミに招かれて金融業界での資金洗浄と最近の悪徳商法の動向という題で講義したことがあったのだ。学生時代、透の先輩であったとかで、透の学生生活を暴露しながらの話は愉快で有益だった。それに若くして――三十六歳の透より二つか三つ、上なだけだ――自分の事務所を持つくらいだから、バイタリティにあふれ、自信にあふれた語り口はエリカに信頼感をあたえた。
法律関係のつながりある者、といえばこの原弁護士以外になかったので、次の日、エリカはすぐにこの事務所を訪れたのである。彼女は仕事が忙しく透の葬式に出られなかったことを悔いていて、彼の教え子ときくや、真

っ先に会ってくれた。それが供養であり、せめてもの罪滅ぼしと考えたらしい。
　「やはり警察にすぐ駆け込むべきだったでしょうか？」
　「……それはまずいでしょう」と事情を聞いた原弁護士。
　「どうもあなたの話を聞いていると、犯罪者はあなたのほうじゃないの？」
　ひろ子は屈託なく笑った。グレーのテーラードスーツに白衿を返した服装のよく似合う彼女は大年増特有の貫禄のある肉づきをした体型を誇っていた。肥満というほどではないにしろ、胸と腰は豊かに厚く、ボリュームいっぱいだ。顔は髪をひっつめにしているせいか、丸顔が強調されているように見える。もっとも、鼻筋がとおり、唇が薄く、口が大きめなので『肝っ玉かあさん』風には見えない。やはり明晰な論理力と推理力で悪と対決している最前線に身を置いている厳しさがにじみでているといったほうがいい。
　「はあ……住居不法侵入ですか……」
　と、エリカは言った。うなずくひろ子。
　「それにたぶん、器物破損罪も加わるでしょうね。警察になんか行ったら、そっちのほうをしつこく聴取されるでしょう」
　エリカは小麦色の顔をきびしく硬化させてひろ子をま

っすぐ見つめた。
　「でもどうせ微罪ですし。私なんかどうなってもいいから、奥様を救けるべきではなかったかと……」
　「うんうん、それもそうだけど――」
　ひろ子はタバコを取り出してルージュをひいた唇にはさむ。
　「……美人弁護士としちゃ、ちょっと幻滅よね。ヘビースモーカーじゃ」
　おおらかな笑みを浮かべ、細い煙をたちのぼらせる。
　「問題は犯罪を構成する要件が揃っているかどうかということなんだけど、話を聞いたかぎりでは、なかなか難しいと思うわ。その、家に押し入っていた一味を告発するというのは」
　「でも、暴力をおこなっているのは明らかですよ。竹刀でお尻を――」と言いかけて、エリカは口をつぐむ。
　「うんうん、そうよね。それが夏美さんの望まない行動であると立証されるなら、立派な犯罪だけれどもね」
　ひろ子は感情を排した法律家の表情で答える。
　「望まないって……望まないに決まってるじゃありませんか」
　「そうかしら。そうとも限らないんじゃなくって？　大人の世界は複雑で奥が深いものよ」
　「ＳＭですか？」エリカは言った。「まさか。先生も夏美さんをご存じでしょう。あの方がそんな趣味をお持

ちになっていると、本気で思っているのですか？」
「その、まさか、があるから大人の世界ってことよ」
「……」
エリカはグッとつまった。透との不倫を言いあてられているような気がした。愛妻家で円満な夫婦生活を営んでいると思われていた透が、じつは自分と爛れたセックスに興じていたなどとは、誰もが、まさか、と驚愕するにちがいないのだ。
「あらあら、本気にしないで頂戴よ」
ひろ子はエリカが深刻な表情になったので、手をふって疑念を打ち消そうとする。
「私も夏美さんをよく知っています。彼女がノーマルで、まともな人間であるのは保障するわ。変態性欲なんて、とても考えられない」
「……私たちだけが、そう確信していても駄目ってことですね……」
「そう――」ひろ子はうなずいた。「透くんがあなたをずいぶん買っていたのを思い出したわ。じつは優秀なんだって」
「じつは？……」エリカは苦笑する。
「ケバイ見てくれのわりに、ってことでしょうね」
「――まわりの評価を鵜呑みにしていたら、法律は必要ないってことですね、先生？」
「うんうん、そういうこと。もちろん補完資料にはな

るけれど、人ひとりを犯罪者にするにはその程度じゃどうしようもないということです」
　「私という証人がいますよ」
　「どこまで信用できますかね。夜中に他人の家で木登りして、覗き見するような女子大生の話を」
　「あの男たちはどうです？　ヤクザ者が大挙して家を不法占拠しているなんて、やっぱりおかしいでしょう？」
　「人相が悪いからといって犯罪者にしていたら、あなた、裁判官や検事はみんな犯罪者よ。あ、弁護士にもたくさんいるか――」
　豪快に高笑いするひろ子。
　「でも、その一人は葬式の日に夏美さんを嚇しにきた三人組のうちの一人だったんですよ。私はそいつに腕をねじりあげられた」
　「その後、お友達になったのかも」
　「夫が死んで、まだ一月もたっていないのに？」
　「夫が死ぬ前から浮気している女房なんて、刷いて捨てるほどいるでしょう」
　「じゃあ、先生は！」エリカはつい声を荒らげて机を叩いてしまう。「あのまま放っておけというんですか？」
　ひろ子は眉をあげて肩をすくめる。タバコを灰皿へ押しつけた。

「怒鳴ったってしょうがないのよ、田淵さん」
血気盛んな若者を諭す口調で言う。
「もちろん手を尽くしてみましょう。とりあえず、福島家へ線香の一本でもあげに行ってこようと思うわ。私だって透くんの友人の一人なんですからね。訪問しても、なんの不自然もないでしょう」
「先生……」
「しかし、私は木登りなんかできませんからね――あなたより体重も重いし――Ｖ・Ｉ・ウォシャウスキーじゃないんだから。違法行為に手を染めたら、弁護士資格を剥脱されちゃうわ」
ひろ子はニッと笑う。
「でもまんざら、役に立たないわけじゃない。これでも海千山千の悪党どもと何年も渡り合っているんだから、洞察力は養っているほうでしょう。嘘をついているかいないかくらい、見抜けるわよ。その後、どういう作戦をとるか、また改めて話しあいましょう。いいわね？」
エリカはうなずいた。
「そうね、当分、今のまま、友達の家を転々としているのが正解ね。連絡先はこまめにこちらへ報告しておいて頂戴。これは命令よ――」

原ひろ子弁護士は多忙な業務の合間をぬってなんとか

時間に都合をつけ、福島家へ向かうことにした。田淵エリカの話をすべて信じているわけではなかったが、彼女が嘘をつく理由も見当らないのである。
　ひろ子はカローラのハンドルを片手で握り、自動車電話のボタンを押した。いきなり来訪する手もないではなかったが、不自然さはかえって敵の緊張感を高めるだけだ。失策を狙うなら、正攻法がいいのである。
　数回のコール音に出たのはエリカが言っていたように不機嫌そうな敵意すら感じられる中年女の声であった。
　ひろ子は名前をのべ、これから訪問して線香をあげたいのだが、と言った。
　「残念ですがね。ちょうど今、家の者はすべて出払っておりますから」
　女は言葉使いは丁寧だ。ひろ子の声の質から学生ではないと判断したのだろう。
　「生前、福島先生には大学でたいへんお世話になりました。なのに、弁護士などをやっておるものですから、なかなか時間がとれませんで、お葬式にもいけなかったのですの。せめてお線香の一本でもあげませんと、気がすみません。なんとか時間を取っていただけませんか。いえ、お手間はけっして患わせはしません。ほんの十分でもけっこうですから」
　ひろ子の職業を聞いて、相手の反応は明らかに変化したようだった。通常、一般人であっても、弁護士だなど

と名乗れば、一様に構えてしまうものである。法律関係者にはこちらから頼むのでないかぎり、まわりにうろついてほしくないというのが一般人の正直なところだろう。だから、女の態度が変わったからといって、即、胸に一物ある人間だというわけにはいかない。
　女は用心深い声で言った。
　「……できれば、奥様が在宅している時にしていただいたほうがいいのではないでしょうか？　奥様もきっとお会いしたいでしょうから」
　やんわりとした拒絶。こちらも引き下がるわけにはいかない。
　「なにぶん忙しい身なものですから――ちょっと鼻につくか？　しかし事実だ。大きな公判を三つも抱え込んでいる――この機会を逃すと、いつになってしまうか、わからないんですよ。夏美さんにはあとでお詫びの電話を入れておきますから。なにとぞよろしく」
　ひろ子の意志の固さを女は不自然に思うだろうか？　際どいところだが、見逃してくれるだろう。弁護士の肩書きはこういう場面では強力なパンチになる。女に後ろ暗いところがあるのなら、ますます断ることはできないはずだ。狡猾な知恵を持っていれば、昨夜の田淵エリカのドタバタ劇と、この突然の法律関係者の訪問とを関係づけるのは容易である。それならば、追い返して不審をもたれるより、好きなようにさせて様子を見る、あるい

は、どんな人間なのか偵察する、そっちのほうを選ぶにちがいないのだった。
　案の定、女はしばしの思案ののち、訪問を了解した。

　この章の残りは有料本編でお読みください。

　　私たちの愛した女弁護士

　簡単に言ってしまえば、この事件は霊感商法という詐欺事件である。ひろ子はまだ、その時は独立しておらず、イソ弁として弁護団の末席に連なっていた程度であった。被害者が全国多数に及んだから、弁護士の人数もふえたのだが、事件そのものはよくある悪徳商法のひとつにすぎない。孤独な老人に狙いをつけ、不安をあおり、『黒檀の壷』と後に言われるようになるその壷を買えば、煩悩は解決され、天命を健康に全うして、極楽浄土に旅立てる、といった謡い文句を囁きつづけて、ついに時下数万円程度のそれを数百万円で買わせるという卑劣な手口である。
　首謀者の名はエリカのメモにあった『千藤翔司』その人である。彼は行動隊長として、全国に暗躍した。つづ

うらうらで販売会を開催し言葉巧みに顧客を勧誘したのだ。もっともこれには共謀者がいた。やはり霊感商法にはハクをつけるためにも、霊能者の存在が欠かせないらしく、胡散臭い新興宗教団体の教祖が絡んでいる。名前は……。
　ひろ子はページをめくった。新聞記事のコピーを見つける。
　（そうそう、こいつ、こいつ――）
　名は『南島青鶴』
　教団の名が『彗星の尾教団』……。いかにも胡散臭そうな名前だ。それでもよく調査してみると、信者の数は数百人の規模であり、北海道の廃村に小規模ながらコミニティを持っていた。南島青鶴には超能力が備わっており、不治の病の人間を何人も救っているという触れ込みである。黒檀の壷はその教祖のＤＮＡの一部を混ぜた土で作られ、それはもう、ご利益は絶大だと、煽りまくったのだった。
　被害総額はわかっただけでも数億円に及んだ。もちろんそれは氷山の一角で、実際にはその倍は荒稼ぎしていたに違いないと言われていた。
　卑劣なのは勧誘の手口ばかりではなく、原告団に入った老人たちへ、信者を使った嫌がらせを執拗に繰り広げたことである。訴えを取り下げないと地獄に落ちる、とか、子孫にたたりがでるぞ、などと手紙や電話を送りつ

ける。あげくは家の前で数人の白装束の信者が座り込み、一日中、不気味な経を読みつづけたりするのであった。もともと被害者の老人たちは信心深いので、こういった嫌がらせには弱く、かなりの脱落者が出たのだ。結局、被告側の不当な裁判引き伸ばしや激化する嫌がらせ等を鑑み、また原告団が高齢化している等をふまえ、損害額の六十五パーセントの金額を被告側が支払うことで和解が成立したのだ。判決まで持ち込むことができれば、きっと勝訴できただろうにと、若手のバリバリだったひろ子は悔しい思いをしたのを覚えている。

しかし、もしそれだけであれば――こういった事件は日常茶飯事だから――やがて記憶も薄れて、思い出のひとつにすぎなくなるはずだったが、それにとどまらせない出来事が和解成立後、ほぼ三ヵ月経過したあとに起こったのだった。

表面的には、それは事件として取りあげられたわけではなかった。黒檀の壷事件の原告団に加わっていた弁護士の中には、ひろ子を含めて、三人の女性弁護士がいた。そのうちの石田真弓弁護士はベテランであり、また俊英として評判が高かったのだが、当然のように副団長をつとめていたし、さわやかな弁舌と淑やかな美貌をいかしてテレビ番組などにも出演、事件の概要と業者・教団サイドの悪業を告発する『広報活動』にも積極的だった。

　その彼女が、三ヵ月たったある日、忽然と姿を消してしまったのである。まったく煙のごとく、失踪したのだ。すわ、大事件と弁護士たちもマスコミも色めき立ったのだが、調べていくうちに、彼女は夫と別居中であり、離婚協議が進行中であったという事実が判明した。さらに数日後、彼女の署名入りの手紙が弁護士会に届き、一身上の都合により、脱会する旨の連絡がなされるに及んで、『事件』は竜頭蛇尾、仕事の疲れと家庭上の問題がからんで人生に嫌気がさしたドロップアウトとして処理されることになったのだ。
　ひろ子がその決着に疑念を抱いているのは、どうも黒檀の壷事件が一段落してすぐに、自分のプライバシーが内偵されている節を感じたことがあったからなのだ。尾行の気配は何度か察知したし、どうも家捜しを受けたような痕跡もあるのである。また、実家に『結婚斡旋会社』なるところから調査員がきて、未婚の女性弁護士のリストを作っているので協力してもらえないかと、ひろ子の私生活を遠回しに探ろうとしていった、ということもあった。不審に思ったひろ子の両親は断り、すぐにひろ子に連絡してきたのだ。
　どれもこれも、その時点では仕事が忙しかったこともあって、ほとんど気に留めはしなかったのだが、石田弁護士の『失踪』が明らかになると、薄れていたそれらの点が線としてまざまざとつながってくるのであった。も

しや、あの邪教集団と悪徳業者は我々を逆恨みして、復讐する機会を虎視眈々と計画していたのではあるまいか。もっとも、単純な誘拐では大騒ぎになりすぎ警察も躍起になって捜査するだろうから、それでは彼らにもメリットがない。弁護士たちの私生活をあらいざらい調査し、弱みを持っている『常識的に見て失踪してもおかしくない』人間をチョイスして、一気に拉致したのではあるまいか。監禁し、脅迫しながら促せば、あんな手紙を書かせるくらい簡単なことだ。むろん、誰もがそれで納得してしまっては、怨恨を晴らすことにはならないから、ただ一人、ひろ子が選ばれて、犯行をほのめかすような証拠とも言えないような証拠を残したのではあるまいか……。

　ひろ子は一応、この考えを同僚に話ししてみたのだが、一笑に伏されただけだった。予想どおりであった。ひろ子自身、自信があったわけではない。どこにも確たる証拠はないのだから。手っ取りばやいのは石田真弓を発見して事情を聞くのが一番なのだが、彼女の行方はその後、風の頼りにもなっていない。教団も千藤翔司も地下に潜ったらしくて、噂も聞いていなかった。

　誰も相手にはしなかったけれども、石田真弓の失踪が報復テロかもしれないという噂は広く静かに弁護士の間に浸透していった。その点を考えれば、千藤等は恫喝の目標を達したことになる。この手の悪徳商法には周期が

あり、流行しては摘発、沈静化。ほとぼりのさめるのを待って、また流行、その繰り返しだ。次に彼が浮上してきたとき、担当した弁護士の頭に女弁護士失踪事件の噂がチラリとでもかすめれば、追及の手もずいぶん鈍くなるのではあるまいか。一瞬の逡巡は詐欺集団をとり逃す、決定的な原因につながりがちなのである。

　この失踪が一般に説明されている理由に基づくものなのか、千藤や南島たちの長期的な戦略によるものなのか、微妙な線だった。

　それにしてもまたひょんなところで遭遇したものである。

　（千藤興業……）あの時の社名とは違っていたが、胡散臭さは似たようなものであろう。今度はどんな悪知恵を働かせているのだろうか。『彗星の尾教団』の総帥、南島青鶴もまた共謀者として近くにいるのだろうか。

　しかし、千藤翔司の名が出てきた以上、これは一挙に深刻な問題としてクローズアップされてくるのである。福島夏美の安否が気がかりだ。そして……。

　（田淵エリカ――、大丈夫だろうか？　彼女は？）

　すぐに連絡してほしいものだと、ひろ子は思った。お転婆を笑って見逃してくれる相手でないことをすぐに報せなければならないのだが……。せめて、ハメを外さないでおいてほしい。

　ひろ子はさっそくこの『事件』に対応するべく、多忙

をきわめるスケジュールの変更の検討に入った。

　田淵エリカは原ひろ子弁護士の切なる願いにまったく背を向けて行動を開始していた。
　どうも原弁護士は頼りにならない、というのが、エリカの判断であった。いや、彼女は優秀な女性で、感じのいい人柄であった。それは認める。しかし、如何せん、彼女は忙しすぎる。とてもこんなアヤフヤな、第三者からみて事件とも言えないような事件に時間を割く余裕などないように思えたのだ。今日だって、二時間も待ちぼうけである。わざわざ弁護士に話を持っていったのは間違いだったかもしれない。
　だが、夏美の状況を想像すれば、やはり事態は一刻を争うようにエリカには思われてならないのだ。唯一の目撃者である自分が、手をこまねいているわけにはいかない。

　この章の残りは有料本編でお読みください。

　　私たちの愛している邪教

彼の言葉をひろ子はすぐさま受け入れたわけではない。当然のように石田真弓弁護士失踪事件の過去が頭をよぎった。彼女が姿を消したときも、まさに煙のように、跡形もなく消息が途絶えたわけだが、その発端はこのような一本の電話であったかもしれない。

（千藤がやはり真犯人であろうか……）

そして、千藤は再び女弁護士誘拐を画策しているのだろうか。その可能性は低い――、とひろ子は判断した。もちろん彼が今夜電話してきたのは福島夏美の一件についてのことだろう。あの女子レスラー派遣家政婦から一報が伝わったにちがいない。弁護士の名が意外にも知った名前であることに気がつき、探りを入れるためにも当たりを付けてきたのである。まだ誘拐どうのこうのという段階ではあるまい。『黒檀の壷』事件のときのような必然性は彼らにはないはずだ。

それに、この電話の会話を録音しているテープがひろ子を神隠しのミステリーから救ってくれるだろう。彼らが事務所の家捜しを強行することに備えて、このテープはすみやかに事務所の秘密の金庫に保管してしまえば、長期無断欠勤を不審に思った秘書や同僚たちがまず最初にそこを調べてくれる。そういうマニュアルができているのだ。

ひろ子のほうも、千藤が何を企んでいるのか、いろいろとカマをかけてみる絶好のチャンスでもあった。会わ

ない手はなかった。
　ひろ子は自分から会見の場所と時間を設定することを条件に千藤の提案に応じることにしたのだ。
　「フフフ、慎重ですな。いつからですか？」
　電話を切る間際になって、千藤はクスクス笑いながら言った。ひろ子は無言のまま受話器を置いたがゾッとする悪寒を覚えないわけにはいかなかった。彼が言わんとしているのは当然石田弁護士の事件である。暗に恫喝しているのだろう。実際に誘拐などという強行手段に訴えなくとも、これだけで相当の効果をもつのだから、リスクを侵してでも女弁護士の一人くらい抹殺してみるべきなのかもしれなかった。
　ともかく、ひろ子が設定した場所である某著名ホテルのその喫茶コーナーはこの時間であるのに目論みどおり何人かの客が談笑していた。何事かあれば、彼ら彼女らが目撃者になってくれるはずだ。つまりこの場にいるかぎり身の安全は保障されている……
　（いやだわ、私、あいつのペースにハマっているじゃないの）
　ひろ子は苦笑を浮かべながら唇の端から細い煙草の煙を吐き出した。
　喫茶コーナーの入り口に千藤翔司の姿があらわれた。
　「いや、原先生、どうもお待たせいたしました」
　黒の背広に身を固めた千藤はゆったりとした足取りで

歩み寄り、立ちあがって迎えたひろ子に手をさしだした。二人は握手をかわした。
「私もあなたも――」とひろ子は言った。「ずいぶん歳をとったわね」
「へへへ、そうですかね。少なくとも先生はちっともおかわりになっていませんよ。あの頃同様、お美しい。いや、僕は今のあなたのほうがずっと魅力的に感じますよ」
あながちお世辞でもないのは、千藤のひろ子の肉体を見る目つきの熱さから察してわかる。ムッとする化粧臭をただよわせた美貌、巨きくふくらんでいる胸、ひきしまった胴部、丸みを帯びたスカートの尻、それらへ順々に送られる視線は、たとえば通勤電車に乗ったときに注がれてくる痴漢めいた男たちのそれと同様か、あるいはそれ以上の猥褻さをもっているのだった。
ひろ子は数年前の記憶がフラッシュバックするようだった。そう、この視線……衣服のうえから撫でまわすような視線が若かったひろ子に、そしてあの石田真弓へ、遠慮なく投じられていたのだった。
ひろ子は首筋に冷汗が流れるのを我慢しながら椅子に座りなおした。
千藤はエスプレッソを注文する。
「ご自分の事務所をお持ちになったのですね。その若さでたいした出世だ。才能に現実が見合うというのは幸

福ですね」
　「運が良かっただけでしょう。幸いなことに私がここまで対してきた悪人たちはあなたのように有能ではなかったのです」
　「ふむ。誉められたと解釈して喜んでおきましょう」
　千藤も煙草に火をつける。
　「何事もいいほうに考えて過ごすのが、長生きの秘訣ですからね」
　コーヒーが運ばれてきた。彼はそれを口にもっていき、赤い唇を尖らせて、一口飲んだ。
　「どうやらあなたも心を入れ替えて、人生を歩んで行く気になったようね。で、新しく事業を起こしたというわけ？」
　ひろ子はもう一本、煙草を咥えた。気をつけないと一日の許容本数を大きく上回ってしまいそうだ。
　「さすがに情報が早いですな」
　「あなたには及びませんけど――」
　「ということは、私が立派にカタギにやっていることも、おわかりなわけだ？　もっとも以前だってカタギでしたがね、私は……」
　「色々と調査してますけど、まだカタギにやっているという証拠はえていませんね。不明な点が多すぎる。千藤興業は」
　千藤は首をすくめた。そしてニヤケながら再びひろ子

の肉体を凝視したりするのである。ひろ子は、胸もとから手を差し入れられ、ブラジャーごと乳ぶさをつかみとられて、ネッチリ揉みあげられているような汚辱の気分になる。
「先生はどうも私を色眼鏡で見られているようですな。だから重要なポイントを見落としているんでしょう。そのまま調査をおつづけになっておられれば、いずれその誤解はとけるものと思いますよ」
「誤解とは……たとえばどういうことですか？」
「どうやら話が核心に入ってきましたね」と千藤。ゆったりと椅子に背をもたれ、足をくんで肩の凝りをほぐすように首を大きくまわした。「しかし社長というのは疲れますね。問題は次から次へと起こってくる。エンドレスのモグラ叩きですよ。何か息抜きでもないととてももたないんだな」
最近、テニスを始めましてね、いやぁ、これがなかなか面白い――と、千藤の話が横道にそれていく。
ひろ子はさえぎるように言った。
「率直に申し上げて、私はあなたが私をここに呼びだした理由だけをお聞きいたしたいですね。趣味の話はまたの機会にすることにして」
「あ、これは失敬。呼び出したのは私でしたな。どーも物忘れがひどくなってね、この頃は」
千藤は笑った。彼の視線がひろ子の顔の中央の秀でた

鼻に集中している。美しい細長のかたちをしている鼻頭にはいつのまにか玉の汗が浮いていた。
　あまりにも執拗に見つめられるのでひろ子は鼻をつまみあげられている不快さを覚えた。これが彼の交渉術で見せる手練手管のうちのひとつなのかもしれない。視線をはらいのけるようにひろ子は千藤に促す。
　「で、どういうことなのです？」
　「我々の会社の携わっているいくつかある仕事のひとつに、人間開発プログラムというのがあるんですが、もうおわかりですね？」
　「まさか。理解できるほどの情報はまだありませんわ」
　「そうですか。ま、その中でもチームが複数あるのですけれど、『人間建てなおし』プログラムというのが本日の焦点のお話です」
　「『人間建てなおし』？　なんです、それは」
　千藤は身を乗り出したひろ子にうなずき、説明をはじめる。
　「ちっとも難しいことじゃありませんね。昔からある話ですよ。ようするに人間的に駄目になってしまった人間を救済し、社会復帰させるためのプログラムです」
　「駄目になった人間を……？　カウンセリングのようなことですか」
　ひろ子は聞き返した。

この章の残りは有料本編でお読みください。
######

私たちの愛している水責め

「私、水着なんて持ってきてませんよ」
我ながら効果の薄い拒絶の仕方だと思ったが、案の定、インストラクターが笑う。
「大丈夫。中にちゃんとあるから。みんな鈴木さんにリードしてもらえば、ちっとも恐がることはないよ」
これ以上、拒むのは大人げない、そんなムードが漂っている。それにしてもＡ・鈴木までが突如、水着姿になるとは意外な展開である。彼女はただのフロント係ではないのだろうか。
「さ、早く――。ユーザーの皆さんの次のカリキュラムにさしつかえがでたらまずいでしょう」
彼女に手を取られ、エリカはしぶしぶ更衣室に足を運んでいく。
彼女に手渡されたのはやはりスクール水着であった。
「あなたにはちょっと小さいかもしれないわ」と、Ａ・鈴木は言いつつ、さっさとエリカの目の前で脱衣し

ていく。絖光るような白い肌を持つ彼女は黒い下着をつけていた。乳ぶさも柔かそうでたわわに実っている。どこか、男なれした身体、という成熟ぶりである。
　エリカは覚悟を決めた。スーツの上着を脱ぎ、スカートのジッパーをおろす。
　ここでさらに信頼を勝ちえれば、千藤興業の深層部分を探る橋頭堡となってくれるにちがいない。
　それにしてもＡ・鈴木は初対面の他人の眼前でヌードになることに、ちっとも臆するようなところがなかった。黒々とした陰毛を生やした跨ぐらを隠そうともせず、全裸になると、なんと豹柄の水着に足を通していくのである。胸の谷間やプリプリした双臀があらわなセクシーな水着である。
　（この女、ナニを考えてんだ）エリカは辟易としながらもブラウスを脱ぐ。
　「立派なおっぱいしてるわねえ！」
　感嘆したようにＡ・鈴木が声を上げる。
　ブラジャーにつつまれた小麦色の肉丘が羞恥に疼いた。
　スカートを足元に落とす。篭にしまい、彼女に背を向けつつ、ブラのバックストラップに手を回した。
　「手伝ってあげるわ」と、Ａ・鈴木はエリカの背後にまわした手よりもすばやくホックを奪いとる。
　「あっ……いいですよ」

　苦笑しながら振り向こうとするエリカを、その肩をつかみ、二の腕をつかみ、背を撫でつけつつ、Ａ・鈴木は軽く封じるのである。
　「……それにこのお肌。ピチピチして弾けるようだわ。若さよねえ。羨ましくて憎いくらい」
　ホックを外し、すべてがあらわになったエリカの贅肉などまるでない美しい背中へＡ・鈴木は手のひらをふれさせて囁いた。背筋がピーンと反りかえる。ただのからかいや羨望以外の感情をエリカはその手に感じた。同性愛を淫らとか変態性欲だとか、進歩的な思想を持っているエリカはそんな風には考えないけれども、Ａ・鈴木の行為にはどこかゾッとさせる嫌悪感が生じてしまう。背筋のくぼみ……浮きあがった肩甲骨……左右の脇腹……彼女の手は遠慮会釈なく這いまわってくる。肩にひっかかっているストラップを細腕へ落とそうとするのにまで介入してくるのだ。
　「アハハ……大丈夫ですよ……」エリカは笑ってその場を切り抜けようとする。
　「いいのよ。これから先輩後輩の間柄になるんだから、ちっとも気にすることはないのよ」
　ちっとも臆することのないＡ・鈴木。えりかは相手を傷つけない程度のスピードでふりむいた。そして頬笑みながらブラをとりさった。Ａ・鈴木の目がエリカの胸の上で揺れている双乳に釘づけとなる。さすがにそれには

触れようとしない。
　「嫌になるくらいデカパイですよね」とエリカは言った。
　「……と、とんでもない。美しいわ……これこそ、理想的な女性の胸だわ……」
　どうやら、あまたいるボーイフレンドたちばかりでなく、同性の目から見てもそれはたぐいまれな造形に富んでいるようだ。エリカはパンティを一気に剥きおろして全裸になった。フサフサした陰毛やムンと垂れこめるような媚肉を隠そうともしない彼女。スパンキングすれば見事な音を発しそうな美巨臀も甘い匂いを放つかのように丸々としている。のびやかな四肢とグラマラスな肉体。エリカは見せつけるように胸を張った。
　色白の身体に豹柄の水着をつけて精一杯のセクシーさを強調しているＡ・鈴木だが、迫力満点のエリカのボディに圧倒されてしまったようだ。口を半開きにしてポカンとしている。
　エリカはスクール水着に手足を通した。なるほどこれは小さい。お尻の肉が半ばはみ出している。バストも胸のカップの部分の縁を引っ張りあげてギュウギュウ押し込まなければならない。必然的に水着は身体のラインをこれでもかというくらいに強調するところとなった。むろん、胸はきつい締めつけに胸板へ押しつけられているわけだが、それでも真ん丸い隆起が双つ、乳首をのせて

盛りあがっていた。水着の生地がのびて透けそうな錯覚にもとらわれてしまう。
「……凄いわ、こりゃ……」
絶句していたＡ・鈴木がようやくつぶやいた。震える手で白いスイミングキャップをかぶり、エリカにもかぶせてやる。
「……あなたの肌の色なら今流行の白い水着がよく似合うと思うけど……」
「ハハハ、でもこれ、懐かしいですよ。女子校生のときだってこんなの付けなかったから。ーー生以来かなあ」
エリカは鏡に自分の姿を映しながら笑った。笑いつつ、隣に映っているＡ・鈴木の表情を観察する。
（やっぱりレズピアンだわ。こいつ――）自分のヒップに集中している彼女のまなざしときたら露骨に色情を漂わせている。まともなレズピアンならば決して見せることない視線だろう。彼女たちの多くは繊細でナーバスで心やさしい人間たちだが、そういったカテゴリーには属さないタイプの女かもしれない。同性愛自体は変態とは考えないが、露悪する淫靡な感情はやはり異常なのだ。
エリカはお尻の谷間に指を這いこまされた不快な気分になった。
「じゃ、行きますか？」今度はエリカが彼女をうなが

した。
　水槽のある部屋へ戻ると、驚いたことに道場でユーザーの女性たちを監督していたあの数人のコーチが集まっているではないか。

　この章の残りは有料本編でお読みください。

　　私たちの愛している牢獄

　酸素の欠乏した苦しさと恐怖、それに手足を拘束されている不自由さが輪をかけて、エリカは再びパニックを引き起こしていた。身体を芋虫のように屈伸させて、なんとか水面へ躍り上がろうとするのだが、藻掻けば藻掻くほど、身体は底へ沈んでいく。もちろん二人の随伴者は力を貸してくれるどころか、逆に頭を、肩を、押えつけるばかりなのだ。
　ゴボゴボといくつもの巨大な泡を口から吐き出した。顔を狂ったように振りたくり、上半身をゆする。半狂乱になって苦しみを訴えた。
　気を失う寸前にＡ・鈴木が背中にまとめられている手のベルトを持ち、さらにインストラクターが足を束ねて

いるベルトを握り、担ぎあげるようにして浮上を開始する。
　顔が水面から出ると、エリカはあごをはずさんばかりに、カッと口を開け、ヒューヒュー喉を鳴らしながら空気を貪った。
　「なんだい、だらしのない。まだ二分にもなっていないじゃないか！」
　怒鳴りつける飯田。福島家に君臨していたあの派遣家政婦と同姓だが、まだエリカはそのことを知らない。
　エリカは頭だけを水面から出すというより、仰向けになって、胸や腹も同時に曝す寝そべった姿勢である。まだ、言葉を発する余裕はなく、緋色の口腔を奥まで見せつけながらゼィゼィとむせんでいる。
　「最初にしてはいいほうだわ」と、Ａ・鈴木は好意的だ。エリカの頭部の横に浮きあがり、後頭部を支えている。「これからじっくり修業すれば、物になるわよ。山田さん――」
　「……は、鼻を……楽にさせ……させて……」
　激しい息遣いの中で、エリカはやっとそれだけの言葉を言えた。口からの酸素の摂取ではじゅうぶんではないのであろう。
　「甘えるんじゃないよ。それだけ大口を開けていれば、大丈夫だ」
　飯田の顔は低い獅子鼻にクリップを付けているのでな

おのこと怪異な形相となっている。
　「でも、少しかわいそうよ。ただでさえ、この水着、小さくて胸が窮屈なのよ」
　「じゃ、胸を肌けてしまえばいいのさ」
　言うが早いか、女インストラクターは水着のストラップに手をかけ、肩を滑らせて二の腕へおろしてしまう。
　「な、なにを！」
　エリカは叫んだが後の祭り。豊満な双つの乳ぶさが胸のうえでブルルンと波打ちながら露出する。
　「へへへ。こんなデカイのを圧迫されていれば苦しいに決まっているよな」
　飯田はニタニタしながら、指でその頂点を弾いた。
　「いい加減にして！」ようやく平素の呼吸に戻りつつあったエリカはきつく声を放った。従順さを装い、この場を切り抜けると作戦をたてたのに、すっかり頭に血が昇っている。「なぜ、こんな目にまであわなければらないのよ！」
　「世間の常識とかけはなれたことをやるから、修業になるんじゃないのかい。大学生なんだから、もう少し頭をお使いよ」
　乳首をつまんでひっぱり、エリカの美貌が歪むのを嗤いつつ、飯田が言う。
　「鼻栓はとれないが、眼鏡なら外してやってもいいさ」

　飯田はエリカの眼鏡をとり去った。充血した呪うようなエリカの視線があらわれた。
　「ケッ、なんだろうね。その目つきは？　まるで飢えたオオカミだよ」
　「……警察に訴えてやるわ……」
　思わずそう口走ってしまったことをエリカは後悔した。Ａ・鈴木の説明ではここには宿泊施設があるのだった。不穏な気配を示せばそのまま監禁されないとも限らない。福島夏美の姿が思い起される。
　エリカは顔をＡ・鈴木にとられた。
　「そんなことにはならないと思うわよ」
　「なぜ？　このまま閉じこめるつもり？」
　「まさか。さっきも言ったでしょう。あなたはこの水中ヨガの修業の疑似体験がすんだ頃には、すっかりここが気に入って進んで修業の道に入ることを望むようになるのよ。ウンウン、閉じこめておく必要なんてないわ」
　「ふん、声も出なくなるまで水責めで責めあげれば、自分で出ていきたくとも出ていけないでしょうね」捨て鉢に言うエリカ。
　「ひねくれ屋さんねえ。まだまだ体験が必要なようだわ。ウン」
　「か、勝手にするがいいわ！」
　「じゃ、勝手にさせてもらうよ」
　と、飯田は今度はエリカの高貴な鼻を滑稽なかたちに

懲らしめているクリップをピンと弾いた。乳首のときとは比べものにならない激しいエリカの悲鳴が沸き起こった。
　「こいつもとっちまいなよ」
　エリカのスイミングキャップが毟りとられる。後頭部でダンゴに止めていた束ねもほどかれてしまった。頭髪のなかに大きな手をつっこまれ、バサバサに跳ねあげられる。すぐさまそれは水面に広がり、濡れていくのである。

　以下は有料本編でお読みください。
######